

しりうちちょう
知内町

ゆのさと
湯の里2遺跡(2)

—北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡近景 NW → SE



F-30 SE → NW

例 言

- 1 本書は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局が行う北海道新幹線建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成28年度に委託を受けて実施した、知内町湯の里2遺跡の埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。
- 2 報告内容は、湯の里2遺跡の平成28年度調査範囲（84㎡）の遺構と遺物である。
- 3 湯の里2遺跡は昭和58年度に発掘調査が行われており、その報告が津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査の報告書として昭和60年に刊行された『湯の里遺跡群』（北埋調報18）の中に掲載されている。本書を『湯の里2遺跡（2）』としたのは、『湯の里遺跡群』掲載分を「湯の里2遺跡（1）」と考えたことによる。
- 4 調査は第1調査部第1調査課が担当した。
- 5 本書は、酒井秀治、吉田裕吏洋が執筆し、文末に執筆者を示した。編集は、酒井が担当した。
- 6 遺物の整理は、酒井が担当した。
- 7 現地調査および室内での写真撮影・整理は吉田が担当した。
- 8 基本基準杭設置については、協友測量設計株式会社に依頼した。
- 9 放射性炭素年代測定については、株式会社加速器分析研究所に依頼した。
- 10 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、知内町郷土資料館、木古内町教育委員会
木元 豊（木古内町教育委員会）、高橋豊彦（知内町湯ノ里保育所）、竹田 聡（知内町教育委員会）

記号等の説明

- 遺構の表記には以下の記号を用い、原則として昭和58年度の調査の遺構番号に続けて確認順に番号を付けた。
H：竪穴住居跡 F：石囲炉・焼土 FC：剥片集中
- 遺構図等には真北を示す方位印を付した。図の天方向は、N-50° -Wである。遺構平面図の「+」は調査区または小調査区ラインの交点で、傍らの名称記号は右下の調査区を表す。また、小黑丸とその下の数字およびセクションレベルは標高（単位m）である。
- 掲載した遺構・遺物の図は基本的に以下の縮尺にしている。ただし、遺構位置図、地形図、遺物出土状況図などは任意の縮尺であるため、各図にはスケールを付けてある。
遺 構 1：40 復元土器 1：3 土器拓本 1：3
剥片石器・磨製石器 1：2 礫石器 1：3（一部1：4）
接合資料 1：3 土製品・石製品 1：2
- 写真図版では、復元土器は任意、土器拓本・礫石器はおおよそ1：3、剥片石器・土製品・石製品はおおよそ1：2で掲載している。
- 遺構の規模は、「長軸の上端×下端／短軸の上端×下端／確認面からの最大深」（単位m）で示している。
- 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ・・・）、遺構内の層序についてはアラビア数字（1、2、3・・・）を使用した。
- 土層の色調は『新版標準土色帖29版』（小山・竹原2007）に準じた。
- 火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山命名委員会1982）に準じ、以下の略号を用いた。
駒ヶ岳d降下火山灰層：K o - d 白頭山-苫小牧火山灰：B - T m
- 遺物図右下の太ゴチックアラビア数字は掲載番号であり、これに後続する小文字アルファベット（a、b、c・・・）は同一個体を示す。
- 石器の大きさは、図の最大長・最大幅・最大厚（単位cm）で示した。破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。
- 石器の実測図中でたたき痕は「V-V」、すり痕は「|←→|」で範囲を示した。また、光沢部分、黒色・赤色付着物部分、被熱部分をドットのスクリーントーンで示した。
- 文中において「北埋調報」としているものは、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書もしくは公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書の略である。

目 次

例 言	
記号等の説明	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
Ⅰ 緒言	
1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	1
3 調査の経過	2
4 遺跡と調査結果の概要	2
Ⅱ 遺跡の位置と環境	
1 位置と環境	5
2 周辺の遺跡	5
Ⅲ 調査の方法	
1 調査範囲	9
2 土工	10
3 測量と記録	10
4 整理の方法	11
5 保管	12
6 遺跡の土層	13
7 遺物の分類	13
Ⅳ 遺構の調査	
1 概要	15
2 遺構と遺構出土の遺物	15
一覧表	25
Ⅴ 包含層の調査	
1 概要	27
2 包含層出土の遺物	27
一覧表	42
Ⅵ 自然科学的分析	
1 湯の里2遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	45
Ⅶ 総括	49

引用参考文献
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

I 緒言	
図 I-1 湯の里 2 遺跡の位置	3
図 I-2 遺構位置図	4
II 遺跡の位置と環境	
図 II-1 遺跡の位置と知内町の地形	7
図 II-2 知内町の地覧図	7
図 II-3 知内町内の遺跡	8
III 調査の方法	
図 III-1 グリッド設定図	9
図 III-2 土層断面図	14
IV 遺構の調査	
図 IV-1 遺構位置図	17
図 IV-2 H-4 (1)	18
図 IV-3 H-4 (2)	19
図 IV-4 H-4 (3)	20
図 IV-5 H-4 (4)	21
図 IV-6 F-28・29・31 (1)・32、FC-1	22
図 IV-7 F-30 (1)	23
図 IV-8 F-30 (2)・31 (2)	24
V 包含層の調査	
図 V-1 包含層出土土器 (1)	31
図 V-2 包含層出土土器 (2)	32
図 V-3 包含層出土石器 (1)	33
図 V-4 包含層出土石器 (2)	34
図 V-5 包含層出土石器 (3)	35
図 V-6 包含層出土石器 (4)	36
図 V-7 包含層出土石器 (5)	37
図 V-8 包含層出土土製品・石製品・接合資料	38
図 V-9 包含層出土遺物分布図 (1)	39
図 V-10 包含層出土遺物分布図 (2)	40
図 V-11 包含層出土遺物分布図 (3)	41
VI 自然科学的分析	
図 VI-1 暦年較正年代グラフ (参考)	47
VII 総括	
図 VII-1 昭和58年度・平成28年度調査遺構位置図	50

表 目 次

I 緒言	
表 I-1 年度別遺構数・遺物点数一覧	4
表 I-2 出土土器点数一覧	4
表 I-3 出土石器等点数一覧	4
II 遺跡の位置と環境	
表 II-1 知内町内の遺跡一覧	8
IV 遺構の調査	
表 IV-1 遺構規模一覧	25
表 IV-2 遺構出土遺物一覧	25
表 IV-3 遺構出土遺物点数一覧	25
表 IV-4 遺構出土掲載土器一覧	26
表 IV-5 遺構出土掲載石器等一覧	26
V 包含層の調査	
表 V-1 包含層出土土器点数一覧	42
表 V-2 包含層出土石器等点数一覧	42
表 V-3 包含層出土掲載土器等一覧	42
表 V-4 包含層出土掲載石器等一覧	43
VI 自然科学的分析	
表 VI-1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	46
表 VI-2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	47
VII 総括	
表 VII-1 年度別遺構数・遺物点数一覧	50
表 VII-2 放射性炭素年代測定試料一覧	50

図 版 目 次

図版 1 航空写真・知内町遠景
図版 2 遺跡近景・調査状況
図版 3 調査風景・基本土層
図版 4 遺物出土状況・調査風景・FC-1
図版 5 H-4
図版 6 F-30
図版 7 F-28・29・31・32
図版 8 H-4 出土の遺物 (1)
図版 9 H-4 出土の遺物 (2)
図版 10 F-30・31・FC-1 出土の遺物
図版 11 包含層出土土器 (1)
図版 12 包含層出土土器 (2)
図版 13 包含層出土石器 (1)
図版 14 包含層出土石器 (2)
図版 15 包含層出土石器 (3)
図版 16 包含層出土石器 (4)
図版 17 包含層出土石器 (5)・土製品・石製品・接合資料

I 緒 言

1 調査要項

事業名	北海道新幹線建設事業地区における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査及びそれに関連する業務		
事業委託者	独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局		
事業受託者	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター		
遺跡名	湯の里 2 遺跡 (北海道教育委員会登録番号：B - 04 - 018)		
所在地	上磯郡知内町字湯ノ里66番地 2		
調査期間	平成28年 5 月 9 日～平成29年 3 月31日 (発掘期間：平成28年 5 月 9 日～6 月 3 日)		
調査面積	84m ²		
調査体制	理事長	越田賢一郎	
	副理事長	中田 仁	
	専務理事	山田寿雄	
	常務理事	長沼 孝	
	第 1 調査部 部長	長沼 孝	
	第 1 調査部 第 1 調査課 課長	中山昭大	
		主査	酒井秀治 (発掘担当者)
	第 1 調査部 第 3 調査課 主査	吉田裕吏洋 (発掘担当者)	

2 調査にいたる経緯

「北海道新幹線」事業は、全国新幹線鉄道整備法 (昭和45年法律第71号) に基づき、整備計画が定められている。平成10年 1 月には、政府・与党整備新幹線検討委員会において、新規着工区間として 3 線 3 区間の着工が認められ、平成12年12月の同委員会では、すでに着工している区間と新たに着工する区間を併せて、平成13年から 3 線 6 区間として整備を推進することとなった。平成17年 4 月27日、北海道新幹線・新青森-新函館間の工事実施計画認可が国土交通省から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 (以下、「鉄建機構」という) へ交付された。

鉄建機構は、北海道教育委員会 (以下、「道教委」という) に北海道新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。それを受けて道教委は路線内および付帯施設建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施し、福島町で館崎遺跡、北斗市内で押上 1 遺跡、木古内町内で蛇内 2 遺跡、大平遺跡、大平 4 遺跡、木古内遺跡、木古内 2 遺跡の 5 遺跡について工事計画の変更が困難な場合は発掘調査が必要とされた。福島町館崎遺跡では平成21～23年度、北斗市の押上 1 遺跡では平成22・23年度、木古内町内の 5 遺跡では平成21～23年度にかけて (財) 北海道埋蔵文化財センター (以下、「センター」という) により、7 遺跡37,166m²の発掘調査が行われた。また、平成25年には新たに新道 4 遺跡で745m²の追加調査が行われた。

その後、平成28年に道教委からセンターに対し、新たに知内町出石地区における防音壁工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査として湯の里 2 遺跡において追加調査の指示があった。センターは、この調査を受諾し、計画を立案、発掘調査を実施した。

3 調査の経過

(1) 発掘経過

5月10日から調査を開始し、基準杭・方格杭打設を行った。方格杭は昭和58年度調査の発掘区設定に合わせて打設した。調査範囲内の伐木等は事前に完了していた。発掘調査範囲は重機が搬入できないことから、表土から人力によって調査を行った。

5月13日から現地調査を開始し、表土に残っていた笹などの除去を行った後、昭和58年度調査との境界ラインと45ラインをメインセクションに設定し調査を開始した。昭和58年度調査との境界ラインを清掃してセクション図を作成したのち、J44区の表土除去を行い、遺物包含層の調査を開始した。IV層調査終了後、45ラインのセクション図を作成し、J45区の調査を行った。調査では、III層下位～IV層にかけて多数の遺物が出土し、竪穴住居跡1軒、石囲炉・焼土5か所、剥片集中1か所を検出した。6月3日に現地調査を終了した。

(2) 整理経過

現地調査中に遺物水洗を行う。6月から北海道埋蔵文化財センターにおいて整理作業を開始した。遺物一次分類、遺物台帳作成、遺物注記、破片接合、土器復元、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理・撮影、図版作成、原稿執筆、遺物収納を行った。

4 遺跡と調査結果の概要

遺跡は、湯の里知内信号場・道の駅しりうちから南へ約500m、知内川の支流である出石川左岸の舌状台地先端部の平坦地に立地する。遺跡の範囲は約20,000㎡の広さで、標高は約37～44mである。範囲の北西側にJR津軽海峡線が通っている。昭和58年にJR津軽海峡線建設工事に伴って1,661㎡の発掘調査が行われ、その後の建設工事によってこの部分は削平されている。

今回の調査報告範囲は遺跡の北西端、北海道新幹線と国道228号線に挟まれた場所になる。JR津軽海峡線建設工事によって北西側に島状に取り残された所で、面積は84㎡、標高は37～38mである。調査前は立木のある笹原であった。平成28年度の調査では竪穴住居跡1軒、石囲炉・焼土5か所、剥片集中1か所を検出した。遺物は土器2,725点、石器等1,323点、合計4,048点が出土した。土器は、縄文時代前期後半の円筒土器下層c・d式が多く出土し、中期初頭の土器も少量出土している。石器は、剥片石器ではスクレイパーやつまみ付ナイフなど、礫石器ではたたき石や扁平打製石器など、土製品ではII群b類土器片を使用して短冊状に整形した擦切土器片が出土している。

昭和58年度調査では竪穴住居跡3軒、土坑3基、石囲炉1か所、焼土27か所が検出されている。遺物は、縄文時代前期～晩期の土器17,270点や石器等20,625点、計37,895点が出土している。土器は、特に前期後半の円筒土器下層c・d式が大半を占め、晩期中葉～後葉の聖山I・II式なども少量出土している。石器は、すり石・スクレイパーが多く出土している。この他、石鏃やつまみ付ナイフといった剥片石器、たたき石などの礫石器も出土している。

舌状台地の後背地には、大学遺跡などの縄文時代前期～後期の遺跡が分布しており、湯の里2遺跡もこれらの遺跡群の一部と考えられる。知内町で発掘調査が行われるのは、昭和60年の湯の里3遺跡以来ということで、久しぶりの調査となった。

(酒井)

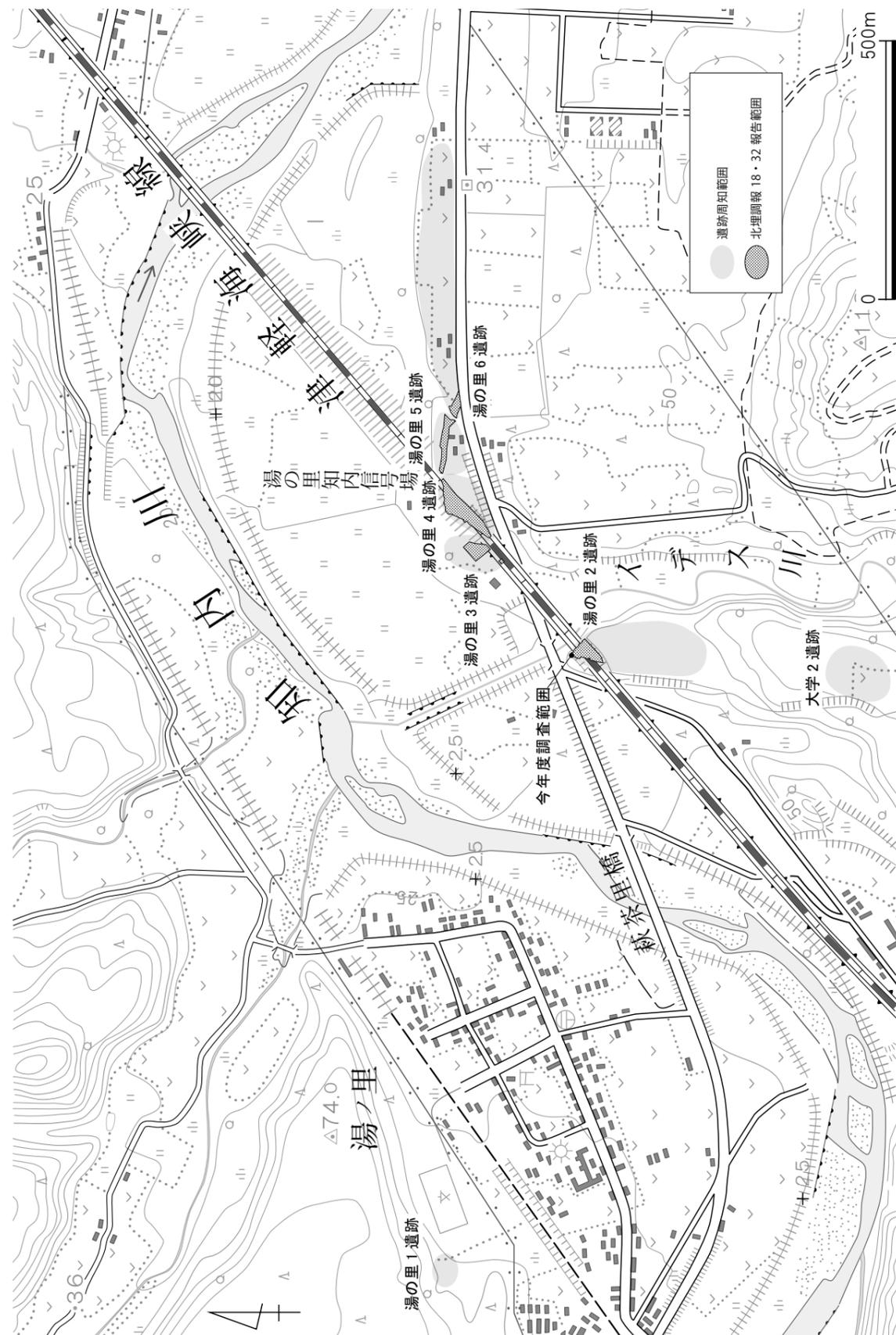


図 I-1 湯の里2遺跡の位置

表 I-1 年度別遺構数・遺物点数一覧

年度	調査面積 (m ²)	遺 構 名					遺物点数			
		竪穴住居跡	土坑	石囲炉	焼土	剥片集中	土器	石器等	小計	合計
昭和58年度	1,661	3	3	1	27	遺 構	3,044	616	3,660	37,895
						包含層	14,226	20,009	34,235	
						小 計	17,270	20,625		
平成28年度	84	1		1	4	遺 構	460	346	806	4,048
						包含層	2,265	977	3,242	
						小 計	2,725	1,323		
合 計	1,745	4	3	2	31	1	合計	19,995	21,948	41,943

表 I-2 出土土器点数一覧

出土位置	分類				合計
	II群b類	III群a類	焼成粘土塊	土製品	
遺 構	452		8		460
包含層	2,152	23	87	3	2,265
合 計	2,604	23	95	3	2,725

表 I-3 出土石器等点数一覧

出土位置	分類																	合計				
	石 鏃	石 槍・ナイフ	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	剥片	石 斧	たたき石	凹み石	台 石	北海道式石冠	扁平打製石器	石 皿	砥 石		石 核	炉 石	礫・礫片	石製品
遺 構	1		2	1	2		2	5	157		5		1		3	3	1	3	16	144		346
包含層	3	1	1	7	26	2	7	17	459	1	20	6	4	2	17	3	1	5		394	1	977
合 計	4	1	3	8	28	2	9	22	616	1	25	6	5	2	20	6	2	8	16	538	1	1,323

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

湯の里2遺跡が所在する上磯郡知内町は、北海道南西部の渡島半島南側に位置する。津軽海峡に面し、亀田半島と松前半島の境目にあたる。北側で木古内町、北西側で上ノ国町、南西側で福島町と町界を接している(図II-1)。函館市からは西へ約60kmである。町域はおよそ東西13.6km、南北13.6km、総面積は196.67km²、人口は平成29年2月末で4,570人である。農業・水産業・林業を基幹産業とする町で、ニラ・カキ・マコガレイは「知内ブランド」として有名である。東側は津軽海峡に面し、北側は河岸段丘、南～西側は300～900m級の尖山、燈明岳、岩部岳、七ツ岳、牛岳、袴腰岳などの山々に囲まれていて、町域の約8割が山岳・丘陵地帯である(図II-1)。市街中心地は知内川河口周辺の平坦部に形成されている。平坦地は、海岸線の海岸段丘上と津軽海峡に注ぐ河川によって形成された河岸段丘上に帯状にある。地質図によると、これらの段丘は泥岩砂質シルト岩互層・砂岩及び酸性凝灰岩で形成された中新世後期の厚沢部層などや、礫・砂及び泥で形成された中位段丘堆積物である(図II-2)。

知内の地名は、アイヌ語の「チリ-オチ(Chir-Ochi)」(鳥-居るところ)に由来する。知内は鷹の産地として有名で、松前藩が徳川将軍家に鷹狩用に献上していた15羽のうち半数以上を知内で捕獲していた年もあるそうである。湯ノ里の地名は、この地区にある北海道最古といわれる知内温泉が由来とされている。湯ノ里地区は昭和4年の地番改正までは萩砂里(ハギサリあるいはハギチャニ)と呼ばれ、アイヌ語の「Haki-Chani」(浅き鮭の産卵するところ)に由来する。現在では知内川にかかる萩茶里橋にその名が残っている。このほか茅堀、出石、正幣堀、ミズノ澤、チリチリ、日影淵、小茂内、ツラツラ、湯尻、湯元、湯ノ澤(地番改正調書)という地名があった。知内町は温暖な地域で冬季の積雪が1m未満と少ないが、湯ノ里地区は1.5～2mと積雪量が多い地域である。

湯の里2遺跡は、湯の里知内信号場・道の駅しりうちから南西へ約500m離れたところに位置する。知内川の河口からは上流に向かって約8kmである。知内川支流の出石川^{イデス}左岸の舌状台地上の先端部に立地し、標高が37～48mほどの平坦地である。遺跡はおおよそ20,000m²の広がりがある。地質図によると、遺跡は礫・砂及び泥で形成された中位段丘堆積物の上に立地している(図II-2)。遺跡の後背地には大学遺跡をはじめとする縄文時代前期～後期の遺跡群が分布している。遺跡からは南西側に青函トンネルの出入口、北東側に湯の里知内信号場、南西～北西側には大千軒岳や七ツ岳などを望むことが出来る。平成28年3月26日に北海道新幹線が開業しており、遺跡からは眼下に新幹線が走行する様子を見ることができた。

2 周辺の遺跡

知内町内の遺跡は、知内川流域と海岸線に沿った段丘上に多くが立地している。平成28年度末現在、知内町内で周知されている遺跡は32か所である(図II-3)。このうち、これまでに発掘調査あるいは一部発掘調査の行われた遺跡は、涌元遺跡、森越遺跡、湯の里1～6遺跡の8遺跡である(表III-1)。湯の里2遺跡の周辺に所在する遺跡は、湯の里1遺跡(13)、湯の里3～6遺跡(19～22)、大学遺跡(8)、大学2～7遺跡(16・28～32)がある。()は登載番号。大学遺跡と大学2～7遺跡は、湯の里2遺跡の後背地に分布し、同じ舌状台地上に立地している。調査は行われていないが、縄文時代前期～後期の遺跡群であることが知られている。上記のうち調査された遺跡について概略を記す。

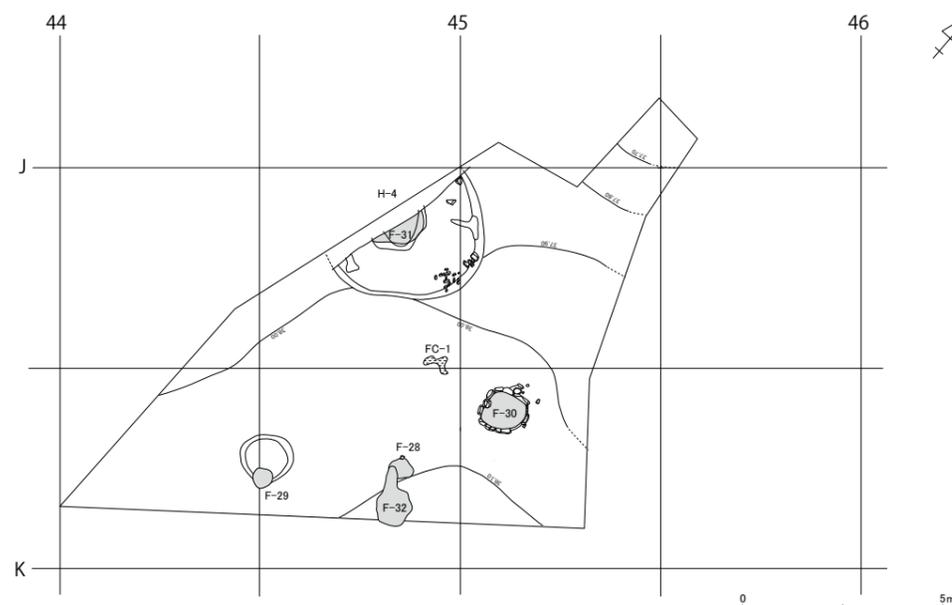


図 I-2 遺構位置図

涌元遺跡（9）：昭和44年に涌元小学校の校庭拡張に伴い、知内町教育委員会が主体となって緊急発掘調査が行われた。主に縄文時代後期前葉の遺物が確認されている。遺構は、竪穴住居跡1軒、フラスコ状ピット1基がみつっている。（知内町教育委員会1972）

森越遺跡（11）：昭和49年に津軽海峡線建設工事に伴う砂取り工事のため2,000㎡の発掘調査が行われている。主に縄文時代中期末の遺構・遺物が確認されており、竪穴住居跡17軒、土坑7基がみつっている。（知内町教育委員会1975）

湯の里1遺跡（13）：昭和53年に知内町湯の里霊苑造成工事に伴う発掘調査が行われた。調査面積は672㎡である。主に縄文時代中期・後期の遺構・遺物が検出されている。遺構は、中期の竪穴住居跡15軒、後期の竪穴住居跡1軒、後期の土坑57基、配石25か所（土坑3基含む）、中期あるいは後期の炉跡10か所、石囲炉5か所である。土坑のうち12基は集石・立石を伴うものである。遺物は、未集計のものを合わせると10万点を超える。（知内町教育委員会1979）

湯の里2遺跡（18）：昭和58年に津軽海峡線建設工事に伴い1,661㎡の発掘調査が行われた。縄文時代前期の竪穴住居跡3軒、時期不明の土坑3基、中期の石囲炉1か所、前期？の焼土27か所が検出されている。遺物は、縄文時代前期～晩期の土器17,270点、石器等20,625点、計37,895点が出土している。（北埋調報18）

平成28年は北海道新幹線建設工事に伴い84㎡の発掘調査が行われた。縄文時代前期の竪穴住居跡1軒、石囲炉・焼土5か所、剥片集中1か所が検出された。遺物は土器2,725点、石器等1,293点、計4,018点が出土した。土器は縄文時代前期後半のものがほとんどを占める。（北埋調報334 本書）

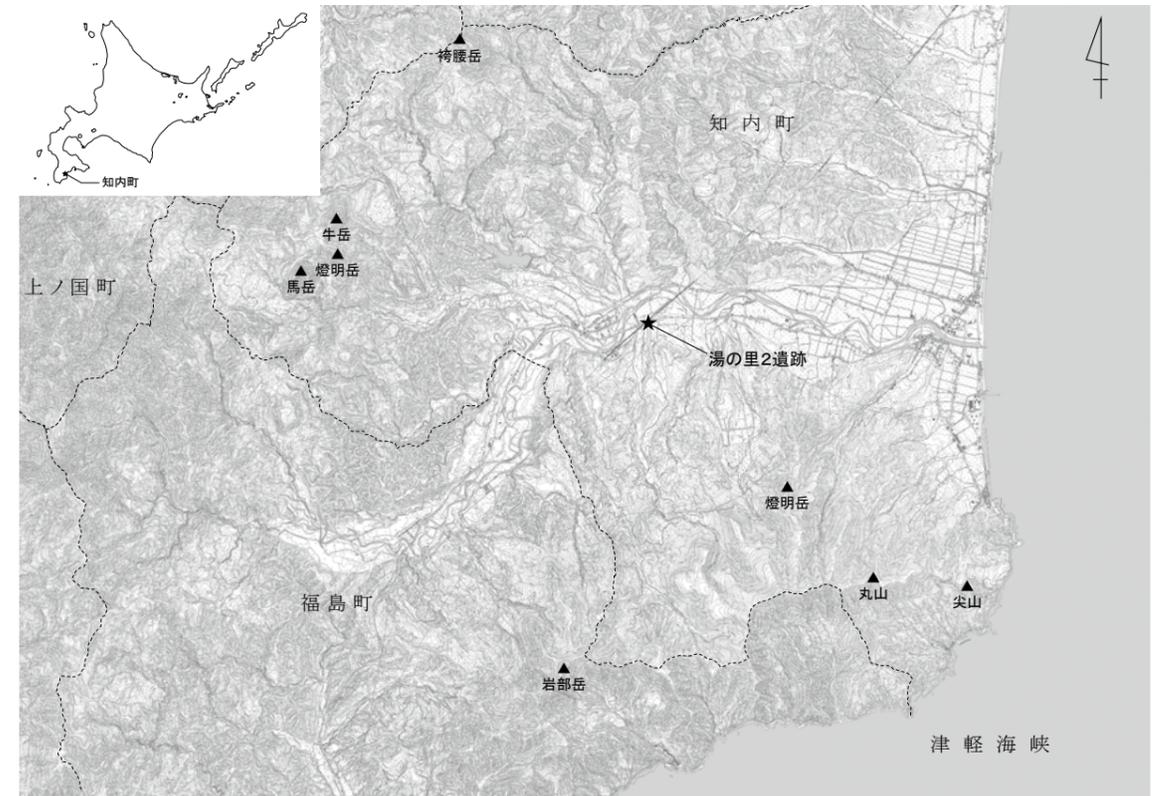
湯の里3遺跡（19）：昭和58～60年に津軽海峡線建設工事に伴い1,111㎡の発掘調査が行われた。縄文時代後期を主体とする遺構・遺物が検出されている。遺構は、石組炉1か所、焼土4か所が確認されている。遺物は、約25,000点が出土し、後期末葉のものが多くを占める。後期末葉の朱漆塗の櫛が2点、楕円形の土版が2点出土している。（北埋調報18・32）

湯の里4遺跡（20）：昭和58年に津軽海峡線建設工事に伴い3,873㎡の発掘調査が行われた。遺構は、旧石器時代の墓1基、縄文時代のフラスコ状ピット11基、Tピット1基、埋設土器1か所、続縄文時代の墓1基、時期不明のピット3基、焼土25か所が検出されている。旧石器時代の墓からは石刃核4点、細石刃5点・ダナイト製の垂飾1点と小玉3点、コハク製の垂飾1点が見つかった。これらは1991年6月に国の重要文化財に指定されている。遺物は、旧石器時代の石器約20,000点、縄文時代後期～続縄文時代の土器・石器が約7,000点出土した。（北埋調報18）

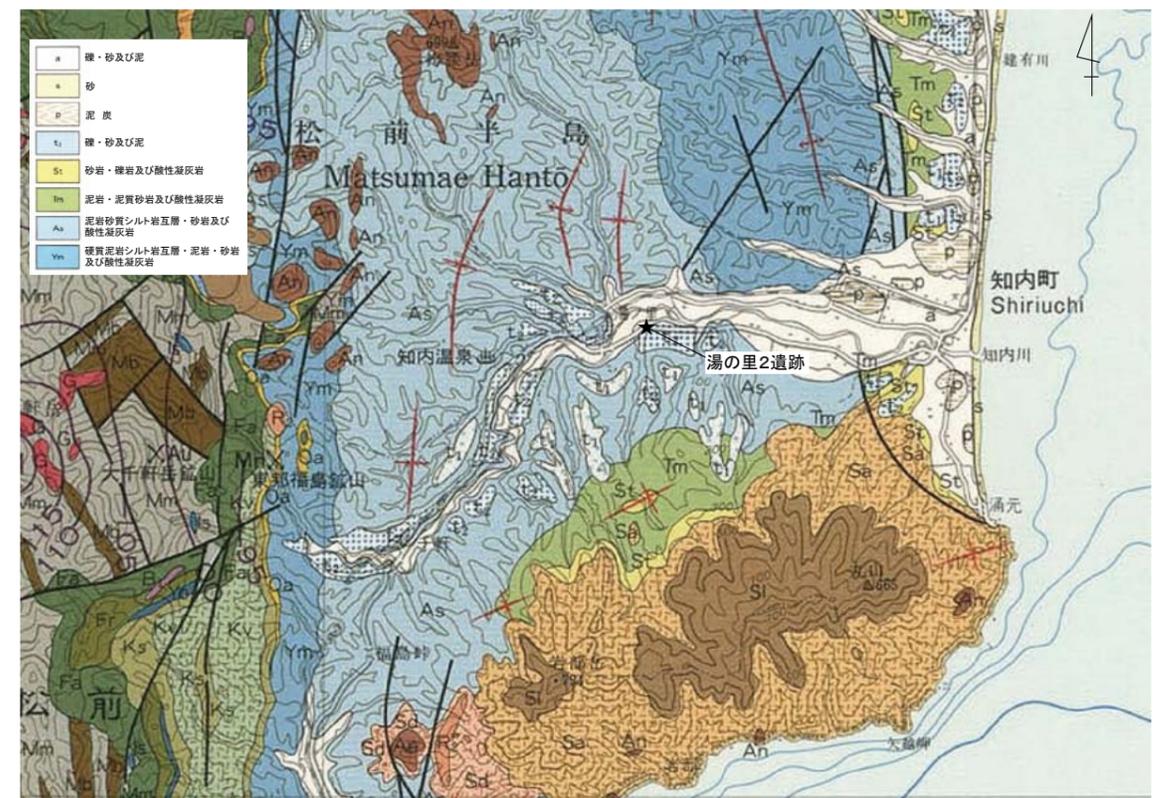
湯の里5遺跡（21）：昭和58年に津軽海峡線建設工事に伴い1,362㎡の発掘調査が行われた。縄文中期～後期の遺構・遺物を確認している。後期のストーンサークル、炉跡3か所、時期不明のピット73基、Tピット1基、焼土11か所が検出されている。ストーンサークルは大小169点の礫を二重に廻らせたもので、外環径約6m、内環径約2.5mである。遺物は中期～後期の土器・石器が約13,000点出土している。（北埋調報18）

湯の里6遺跡（22）：昭和58年に津軽海峡線建設工事に伴い663㎡の発掘調査が行われた。遺構は、縄文時代晩期の石組炉3か所、焼土10か所がみつっている。遺物は、主に縄文後期（堂林式）・晩期（大洞C₂～A式）のものが出土している。（北埋調報18）

（酒井）



図II-1 遺跡の位置と知内町の地形（60万分の1）（平成18年国土地理院刊行の数値地図25000「函館」を加工して使用）



図II-2 知内町の地質図（60万分の1）（昭和59年通商産業省工業技術院地質調査所発行の1：200,000地質図「函館及び渡島半島」を加工して使用）

表II-1 知内町内の遺跡一覧

登録番号	遺跡名	種別	主な時期	調査歴(報告年)
B-04-01	村中遺跡	遺物包含地		
B-04-02	頃内A遺跡	遺物包含地		
B-04-03	頃内B遺跡	遺物包含地		
B-04-04	荒神社遺跡	遺物包含地		
B-04-05	涌元谷地遺跡	遺物包含地		
B-04-06	涌浜遺跡	遺物包含地		
B-04-07	成沢遺跡	遺物包含地		
B-04-08	大学遺跡	遺物包含地		
B-04-09	涌元遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	1969 町教委(1972)
B-04-10	脇本館跡	館跡	中世	
B-04-11	森越遺跡	集落跡	縄文(前期~中期)	1974 町教委(1975)
B-04-12	矢越小遺跡	遺物包含地		
B-04-13	湯の里1遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期・晩期)	1978 町教委(1979)
B-04-14	サンナシ遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	1973 野村崇・仁礼秀道(「古代文化」27-8 1975)
B-04-15	元町遺跡	遺物包含地		
B-04-16	大学2遺跡	遺物包含地		
B-04-17	重内川左岸遺跡	遺物包含地		
B-04-18	湯の里2遺跡	集落跡	縄文(前期~晩期)	1983・2016 道埋文(1985・2017本書)
B-04-19	湯の里3遺跡	墳墓	縄文(早期~晩期)	1983~1985 道埋文(1985・1986)
B-04-20	湯の里4遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文(後期~晩期)・続縄文	1983 道埋文(1985)
B-04-21	湯の里5遺跡	集落跡	縄文(後期・晩期)	1983 道埋文(1985)
B-04-22	湯の里6遺跡	墳墓	縄文(後期・晩期)	1983 道埋文(1985)
B-04-23	森越2遺跡	遺物包含地		
B-04-24	森越3遺跡	遺物包含地		
B-04-25	中の川1遺跡	遺物包含地		
B-04-26	中の川2遺跡	遺物包含地		
B-04-27	中の川3遺跡	遺物包含地		
B-04-28	大学3遺跡	遺物包含地		
B-04-29	大学4遺跡	遺物包含地		
B-04-30	大学5遺跡	遺物包含地		
B-04-31	大学6遺跡	遺物包含地		
B-04-32	大学7遺跡	遺物包含地		

町教委：知内町教育委員会、道埋文：北海道埋蔵文化財センター
サンナシ遺跡は表面採集資料の報告



図II-3 知内町内の遺跡

III 調査の方法

1 調査範囲

(1) 調査区の設定と座標値

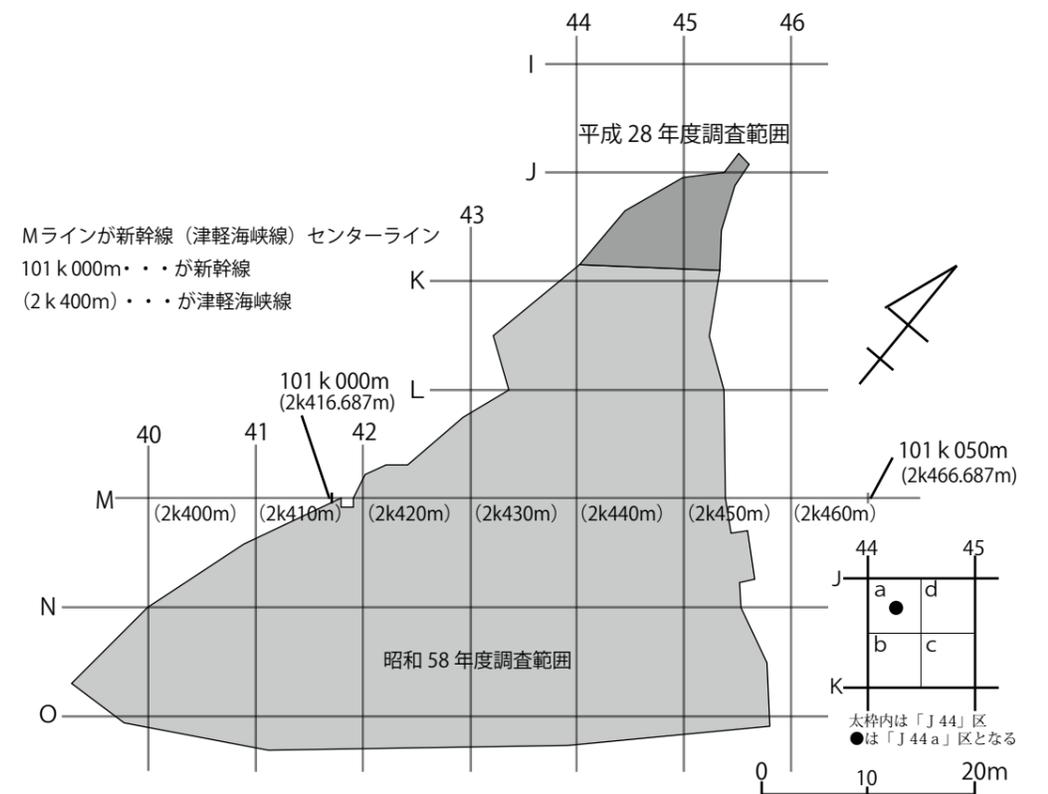
昭和58年度調査の際に用いた調査区を踏襲して調査区の設定を行っている。

昭和58年度調査の横ラインは、津軽海峡線センターラインを方格設定の基線とし、基線をMラインとして木古内へ向かって左側をLライン、右側をNラインとして順次10mごとにアルファベットを用いてラインを設定していた。縦ラインは、方格設定の原点として2k000mを使用し木古内駅側へ向かってアラビア数字で10mごとにラインを設定していた。

今回の調査では、横ラインは津軽海峡線のセンターラインと北海道新幹線のセンターラインが同一線上にあることから、これをMラインとした。M0杭は、津軽海峡線の2k000mであり、北海道新幹線では100k583.313mとなる。これを踏まえるとM40杭は2k400m(100k983.313m)となり、M44杭は2k440m(101k023.313m)、M45杭は2k450m(101k033.313m)となる。これをもとに方格を設定した。

方格の名称は過年度調査に準じている。方格の間隔は10mとした。方格を区画する線にはアルファベット(北東-南西方向)とアラビア数字(北西-南東方向)を与え、調査区(グリッド)の名称は方格の北西角で交差する2つの線名を合わせて読む(例：J44)。さらに、10m方格を5m四方に分割して、反時計回りに西角からa・b・c・dと呼ぶ小調査区(小グリッド)を設置し、調査の便宜を図った。

基線上の2点と平成28年度調査範囲の平面直角座標は第X I系で、以下のとおりである。合わせて、記載した杭の杭高を記す。



図III-1 グリッド設定図

基線上 M40杭 : 2 k 400m (100 k 983. 313m)	X = -266711. 372	Y = 6789. 731
北緯41度39分55. 21217秒 東経140度25分09. 93918秒		
基線上 M50杭 : 2 k 500m (101 k 083. 313m)	X = -266646. 636	Y = 6865. 948
北緯41度39分56. 70292秒 東経140度25分11. 60512秒		
調査方格名称 J44 c 杭	X = -266663. 186	Y = 6807. 845
北緯41度39分54. 96507秒 東経140度25分08. 98626秒		
調査方格名称 J45 b 杭	X = -266659. 949	Y = 6811. 656
北緯41度39分54. 38212秒 東経140度25分09. 91405秒 杭高38. 882m		

この平面直角座標は「世界測地系」に基づいた「測地成果2000」の座標である。

2 土工

(1) 掘削

調査範囲の四方が崖面になっていることから、転落防止のためにクリアランスを設け、トラロープを周囲に張って事故防止に努めた。

掘削作業には主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹べら・竹串を使用して遺構・遺物を傷つけないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には炬箸、ブラシなどを併用した。移植ゴテでは掘ることが困難な場所や、遺構・遺物の見られない範囲、表土や攪乱などではスコップを併用した。木根や笹根の除去のため、のこぎりや根切りバサミ・枝切りバサミを使用した。

排土は西側斜面から直接排土を行った。崖下に大型土嚢を設置して排土が雨水などにより広がらないようにした。今回の調査は線路に隣接するため、風による遺物収納袋などの飛散には十分な注意をはらって行った。

(2) 埋め戻し

調査終了後に工事が行われることから、埋め戻しは行っていない。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

5 m × 5 m 方眼の交点に打設した方格杭を平面測量の基準とした。基準杭 (J 45 b 杭) には杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオートレベルと 1 mm 目盛のアルミ製スタッフを用いて、基準杭の標高と測量対象の比高を直接観察した。平面測量は測量杭を基準として手測りによって行った。

遺構・遺物の出土状況等の実測図は、B 3 版セクションフィルムに基本的に1/20縮尺で記録した。

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

発掘現場での撮影は 4 × 5 版銀塩カメラをメインにデジタルカメラを併用して使用した。4 × 5 版銀塩カメラにはスライドアダプターを装着し 6 × 7 版フィルムを中心に使用した。フィルム・デジタルとも 2 コマを同露出で撮影し、1 セットとした。撮影の際は遺構の形状、遺物の出土位置など適切な情報を記録することに留意した。

b 撮影機材

撮影機材・フィルムは下記を使用した。

カメラ : WIST社 WIST45VX (銀塩カメラ)、SIGMS社 sd Quattro・DP-0 Quattro、Nikon社 D5500 (デジタルカメラ)

フィルム : フジフィルム ネオパン100アクロス、(モノクロフィルム)、フジフィルム フジクロームプロビア100F (カラーリバーサルフィルム)

c 撮影データ

発掘現場での撮影データ (カットNo、撮影日、被写体、出土位置、層位、撮影方向、フィルム種類) を野帳に記入し、デジタルカメラの画像と照合して写真台帳を作成した。 (吉田)

4 整理の方法

(1) 一次整理作業

遺跡内より出土した土器・石器等は、野外作業と並行して現地で水洗・乾燥を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して、遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いた乾燥かごに遺物を入れて、屋外もしくは屋内において行った。水洗・乾燥の終了した遺物は、収集の単位ごとに分類して収納した。遺物は、現地調査終了後に北海道埋蔵文化財センター (以後センター) へ搬送した。

センターでは、分類、遺物カードの添付、遺物台帳の作成、注記作業を行った。分類、遺物カードの添付を行った後、それぞれに遺物番号を与えて、遺物台帳に登録した。遺物台帳は、土器・土製品と石器等に分けて作成している。B 5 判の様式を印刷して手作業で記入し、遺構・包含層を分けて全遺物を登録した台帳を作成した。台帳には出土遺構またはグリッド名のほか、遺物番号・取上日・層位・遺物名・分類・材質 (石器等の場合) ・点数・その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードと共に遺物番号ごとにチャック付ポリ袋に納めた。遺物カードは土器等と石器等で色を分けている。土器を「さくら色」、石器等を「黄色」とした。

注記は手書きによって行った。注記対象は、土器片が微細なものを除く大多数、石器等が剥片、礫・礫片を除く狭義の石器である。注記できなかった遺物は、遺物番号ごとに「未注記」と記入したポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。注記は、遺跡名の略号、遺構番号またはグリッド名、遺物番号、出土層位の順に記した。遺跡の略号は「ユ2」とした。

注記例 湯の里2遺跡

遺 構 : ユ2. H-4. 2. 床面

包含層 : ユ2. J44b. 3. IV

なお、遺物台帳は手作業で紙へ記入したものを基にパソコン上で表計算ソフト (Microsoft Excel) に入力し管理している。整理作業の進捗により遺物の分類等に変更があった場合には、手書きの台帳とExcelのデータを同時に修正した。

(2) 二次整理作業

図面等

遺構や遺物出土状況の原図は訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原図に書き込んでいる。その後、原図から 1 mm 方眼の方眼紙に鉛筆で素図を作成している。素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト (Adobe Illustrator CS6) により補正・加工して版下を作成した。

土器の整理

土器については、分類の見直しと細分類を行いながら、接合作業を中心に整理を進めた。作業に当たっては遺構と包含層の接合、同一個体の破片を把握することに努めた。接合作業の結果は、分類・出土地点・遺物番号・点数・同一個体破片の有無などを接合台帳に記入した。接合関係が認められた個体は、接合の程度により立体復元、土器拓本、未掲載に分け、個体ごとに適宜判断し図化を行った。未接合の破片資料のうち、文様構成・器形のわかる口縁部・胴部・底部については、土器拓本を作成した。立体復元は、遺物台帳と破片の照合を行って復元台帳の作成→再接合→破片接着→樹脂充填の手順をとった。立体復元と拓本断面については人手による原寸実測を行い、2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。接合・復元作業と並行して、集計表・分布図を作成した。

石器等の整理

石器については、分類の見直しを行いながら、破損品の接合作業を行った。遺構・包含層ごとに完形品を中心に人手による原寸実測を行い、剥片石器・磨製石器・石製品は原寸で、礫石器は2/3もしくは1/2縮尺素図をもとに墨入れを行った。これらの作業と並行して集計表・分布図の作成を行った。
(酒井)

写真

a スタジオ撮影

撮影方法：光源はストロボを使用している。剥片石器の俯瞰撮影は、SD1 Merrill、その他の撮影はDP3 Merrillを用いて行った。同露出で2コマ撮影し、1セットとした。

撮影機材：スタンド：トヨウエイトスタンド

カメラ：SIGMA社SD1 Merrill・DP-3 Merrill

レンズ：SIGMA社 MACRO 105mm F2.8 EX DG OS HSM

ストロボ：ジェネレーター（CA3200）、発光部（CA32H）

b 現像

フィルム現像：モノクロフィルムは自動現像機（ILFORD ILFOLAB FP40）を使用して、自家処理を行っている。

デジタル処理：デジタルカメラ撮影のRAWデータはSIGMA Photo ProでTIFFに変換し、Adobe Photoshop CS6で調整した。フィルム撮影のものはリバーサルフィルムをスキャナー Hasselblad Flextight X5でデジタル化し、Adobe Photoshop CS6で調整した。調整した画像から写真図版を作成した。

c 保管・管理

フィルム・デジタルデータは1コマずつ番号をつけ、種類ごとの連番で管理している。フィルムに触れる時は手袋を着用し、油分からの変化・劣化・カビの発生を防いでいる。同露出で撮影した2コマのうち1コマはオリジナルフィルムとして使用していない。使用頻度や貸し出し依頼の多い写真は、デュープフィルムの作成やスキャニングによるデータ化で対応している。写真アルバムはすべての調査・整理作業が終了した後、常温・定湿の特別収蔵庫に保管される。

デジタル撮影のデータは、外付けHDD（NAS HDD）2台にミラーリング保存を行う。最終的にその2台は分散保管される。
(吉田)

5 保管

今回の報告に関する出土遺物については、調査年度・遺跡名・遺物名・分類・収納番号等を記した

ラベルを貼ったコンテナに収納し、収納台帳を作成した。遺物は収納台帳と共に知内町へ返却される予定である。図面等はすべてA2判図面ファイルに調査年度・遺跡名を付け収納している。図面等や写真フィルム等は、道立北海道埋蔵文化財センターにて保管される。

6 遺跡の土層

基本的に昭和58年度の土層と同じである。

I層：表土

II層：灰白色火山灰層。F-31の上の凹みに堆積している。Ko-dと考えられる。

II層：火山灰層：腐植化している。縄文時代晩期の遺物包含層。

III層：腐植土層：黒褐色土。縄文時代前期～晩期の遺物包含層。

IV層：漸移層：黒褐色～褐色土。白色細粒火山灰の小ブロックが点々と分布している。縄文時代前期の遺物が出土している。

V層：ローム層：黄褐色土。

VI層：段丘礫層：10～60cmほどの亜円～円礫で構成されている。

7 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期に属するものをI群とし、以下前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群とした。続縄文時代のものはVI群、擦文文化期のものはVII群である。また、a・b類に二分したものはa類が前半、b類が後半を意味する。同様にa・b・c類に三分したものはa類が前葉、b類が中葉、c類が後葉を意味する。さらに細分を必要とする場合は、アラビア数字の枝番号を付した。なお、今回の調査では、I群・IV群・V群・VI群・VII群は出土していない。

I群 縄文時代早期に属する土器群

II群 縄文時代前期に属する土器群

a類 縄文の施された丸底・尖底の土器群

b類 円筒土器下層式土器群

III群 縄文時代中期に属する土器群

a類 円筒土器上層a式・b式、サイベ沢VII式、見晴町式に相当するもの

b類 榎林式、大安在B式、ノダツブII式などに相当するもの

IV群 縄文時代後期に属する土器群

V群 縄文時代晩期に属する土器群

(2) 石器等

石器は下記の分類を使用した。点数には破片を含む。

剥片石器群：石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、Rフレイク、Uフレイク、剥片

礫石器群：石斧、たたき石、凹み石、すり石（北海道式石冠、扁平打製石器）、台石、石皿、石核、礫・礫片

土製品：擦切土器片、焼成粘土塊

石製品：線刻礫

(酒井)

IV 遺構の調査

1 概要

今年度調査範囲は昭和58年度調査範囲の北西側に位置する。知内川の支流である出石川左岸の舌状台地の先端部にあたり、昭和58年の津軽海峡線の工事によって島状に取り残された84㎡が調査範囲である。南東側が北海道新幹線に面する斜面、北東側が出石川に面する崖面、北西側が国道228号線に面する崖面、南西側が町道出石大学線に面する崖面となっている。調査範囲内は平坦地で、ここに遺構が分布する。標高は37～38mで、周辺との比高差は15～17mである。

遺構は、竪穴住居跡（H）1軒、石囲炉・焼土（S・F）5か所、剥片集中（FC）1か所を検出した。昭和58年度の調査では竪穴住居跡（H）3軒、土坑（P）3基、石囲い炉（S）1か所、焼土（F）27か所を検出している。遺構出土の遺物は、土器が460点、石器等が346点、合計806点が出土している（表IV-3）。土器は、縄文時代前期後半のⅡ群b類土器である。石器は、スクレイパー、たたき石、扁平打製石器が多い。

2 遺構と遺構出土の遺物

(1) 竪穴住居跡

H-4（図IV-2～4／表IV-1～5／図版5・8）

確認・調査 J44d区を調査中に、IV層上面において暗褐色土の落ち込みを確認した。45ラインメインセクションを土層観察面として暗褐色土を掘り下げたところ、しまりのある床面と緩やかに立ち上がる壁面を検出した。西側の半分は崩落によって失われている。

覆土 2層に分層した。1・2層は流れ込み等による自然堆積と考えられる。埋没途中の凹みに覆土と床面を掘り込んでF-31が作られている。

形態 西側が崩落しているため、平面形は不明だが、円形～楕円形になると推測される。壁面は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。床面中央をF-31によって壊されている。

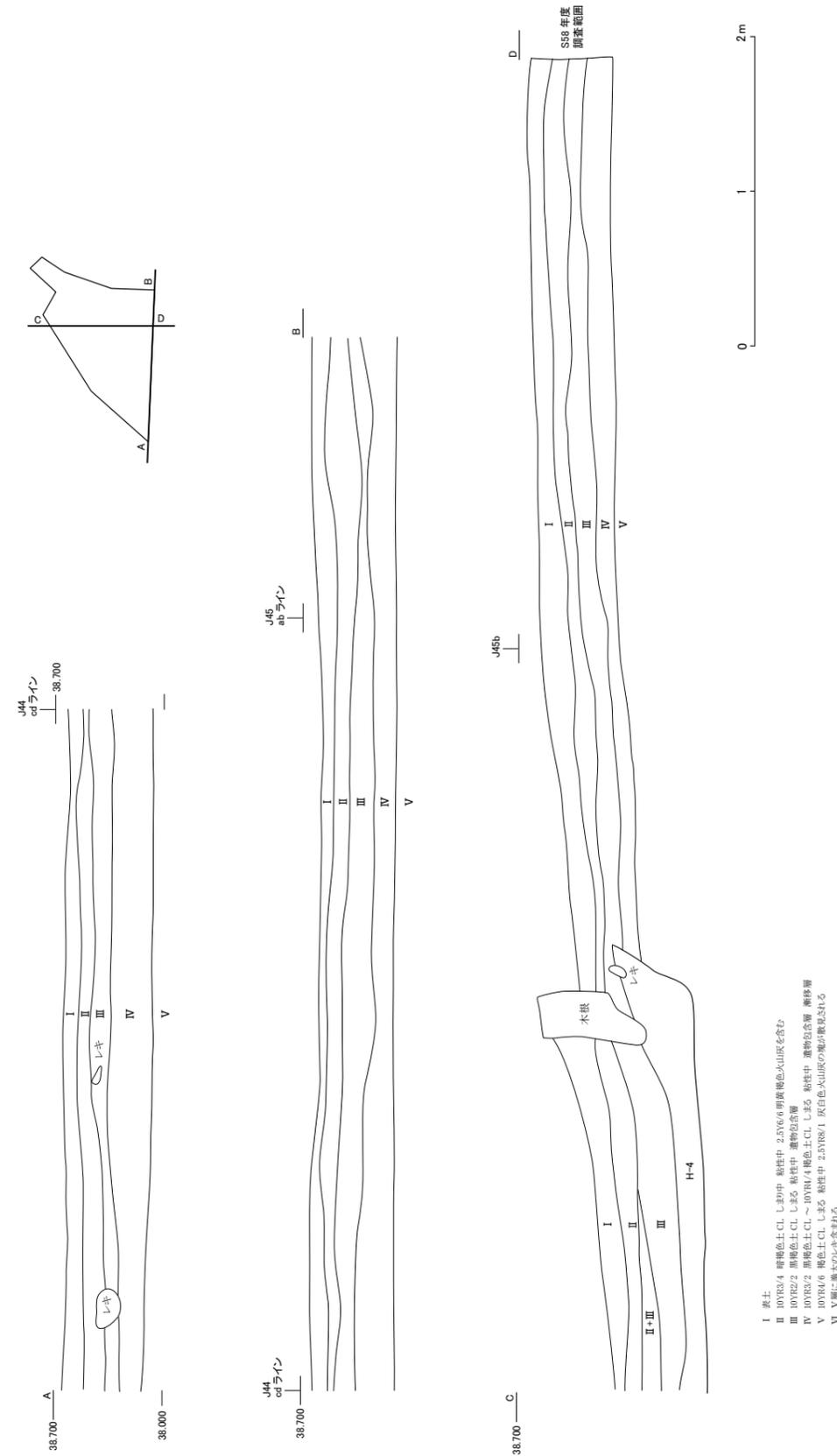
付属遺構 なし。東側壁面付近から礫が集中して出土したが、F-31の掘り込みを作った際にV層から出た礫を置いたものと推測される。

遺物出土状況 南側の床面直上～壁面にかけての覆土2層からⅡ群b類土器が集まって出土している。北側の床面から大型の礫2点が出土している。

土器はⅡ群b類土器443点が出土した。そのうち、覆土2層の床面直上～壁面からⅡ群b類土器138点が出土した。石器等は236点が出土した。石鏃1点、石錐1点、つまみ付ナイフ1点、スクレイパー2点、Rフレイク2点、Uフレイク4点、石核3点、たたき石1点、扁平打製石器3点、石皿1点、砥石1点、剥片111点、礫・礫片105点、焼成粘土塊4点である。

時期 出土した遺物から、縄文時代前期後半と考えられる。

遺物土器：1～15はⅡ群b類土器。3～5はⅡ群b-3類土器、1・2・6～14はⅡ群b-4類土器、15はⅡ群b-5類土器である。1は口縁が平坦で、幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯に5本の縄線文が施され、2本一組の組紐状の縄線を縦位に施文している。体部は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせられて施されている。2は胴部～底部破片。体部は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせられて施されている。3～8は口縁部破片。3・4は口縁が平坦で、やや幅広の口頸部文様帯下端を2段の結束羽状縄文で区画し、無文地の文様帯に入れ子状の菱形



図Ⅲ-2 土層断面図

文が施されている。同一個体の可能性がある。5は幅広の口頸部文様帯の上下を3本一組の組紐状の縄線で区画して結束羽状縄文を施し、3列とみられる刺突文が施文されている。6～8は幅の狭い口頸部文様帯下端を微隆帯で区画しているもの。6は無文地の文様帯に縄線文を施している。微隆帯には縄の圧痕が施されている。体部は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせで施されている。7は無文地の文様帯に縄線文が施されている。8は表面が磨滅しているため文様は不明だが、体部は単軸絡条体の回転文とみられる。胎土に砂が多く含まれている。9～13・15は胴部破片。9～11は体部に単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が組み合わされて施されている。12・13は体部に単軸絡条体の回転文が施されている。15は微隆帯に刺突を施し、体部は単軸絡条体の回転文と結束第2種の羽状縄文が施されている。14は底部破片。上げ底で体部は単軸絡条体の回転文、体部下端には結束羽状縄文が施されている。

石器：16は石鏃。尖基のもの。頁岩製。17は石錐。円基で涙滴形の石鏃の尖頭部を機能部に転用したと考えられる。機能部には磨滅がみられる。頁岩製。18はつまみ付ナイフ。縦型でおもて面側縁と裏面右側縁を調整している。裏面に弱い光沢痕が確認できる。頁岩製。19はスクレイパー。剥片の両側縁に刃部を設けている。頁岩製。20はたたき石。扁平な楕円礫の背部中央の上方にたたき痕がみられる。台石の可能性も考えられる。泥岩製。21～23は扁平打製石器。安山岩製。21は扁平礫の下側縁を加工してやや幅の広いすり面を作出し、長軸両端を打ち欠いて抉りを作成している。北海道式石冠に似た形状をしている。22は板状礫の周縁を打ち欠いて整形し、下側縁に幅の狭い機能部を作出している。23は板状礫の長辺を一部打ち欠いて非常に幅の狭い機能部を作出している。24は砥石。板状礫の両平坦面に幅の広い緩やかな凹状のすり面がみられる。腹面には敲打痕がみられ、たたき石もしくは台石としても使用されていたと考えられる。砂岩製。25は石核。拳大ほどの円礫が原石と思われる。稜の部分に細かい剥離が多くみられ、礫器やたたき石のような用途に使用された可能性がある。

(2) 石囲炉・焼土

F-28 (図IV-6 / 表IV-1 / 図版7)

特徴 J44c区のⅢ層を調査中に焼土粒を含む褐色土の範囲を確認した。半截して調査したところ、ごく薄い被熱層を確認した。遺物は出土していない。

時期 周囲から出土する遺物から縄文時代前期後半～中期初頭と考えられる。

F-29 (図IV-6 / 表IV-1 / 図版7)

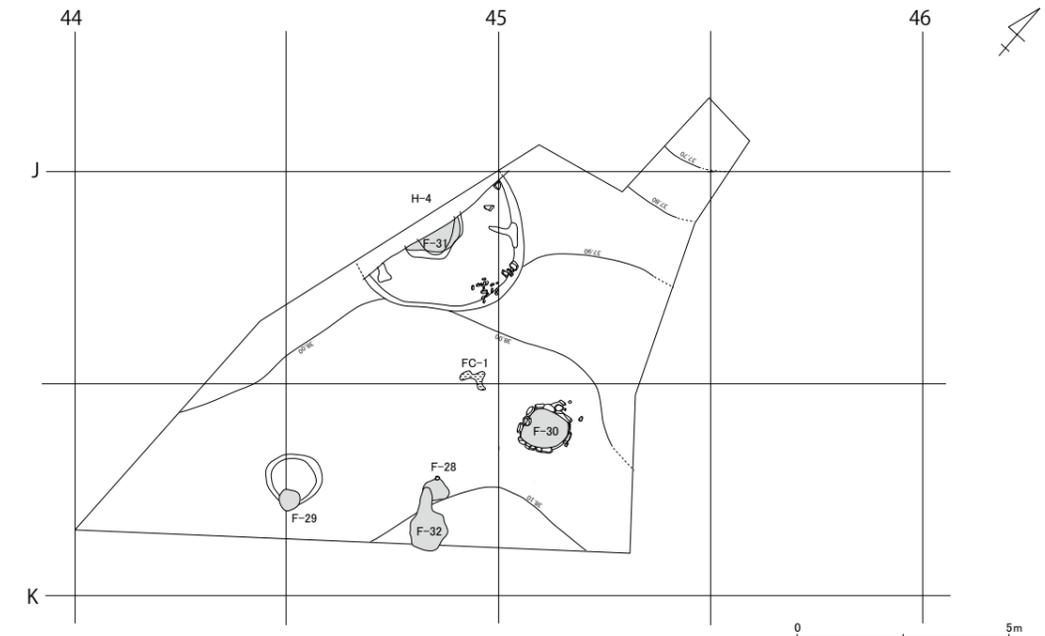
特徴 J44b・c区のⅢ層を調査中に褐色の焼土範囲を確認した。半截して調査したところ、レンズ状に被熱した厚さ20cmほどの焼土を確認した。直径約1m、深さ約7cmの円形のくぼみを埋戻し、その一部に焼土が形成されていた。F-30・31と類似した検出状況で、周囲の包含層から被熱礫が出土していることから石囲炉であった可能性がある。遺物は出土していない。

時期 周囲から出土する遺物から縄文時代前期後半～中期初頭と考えられる。

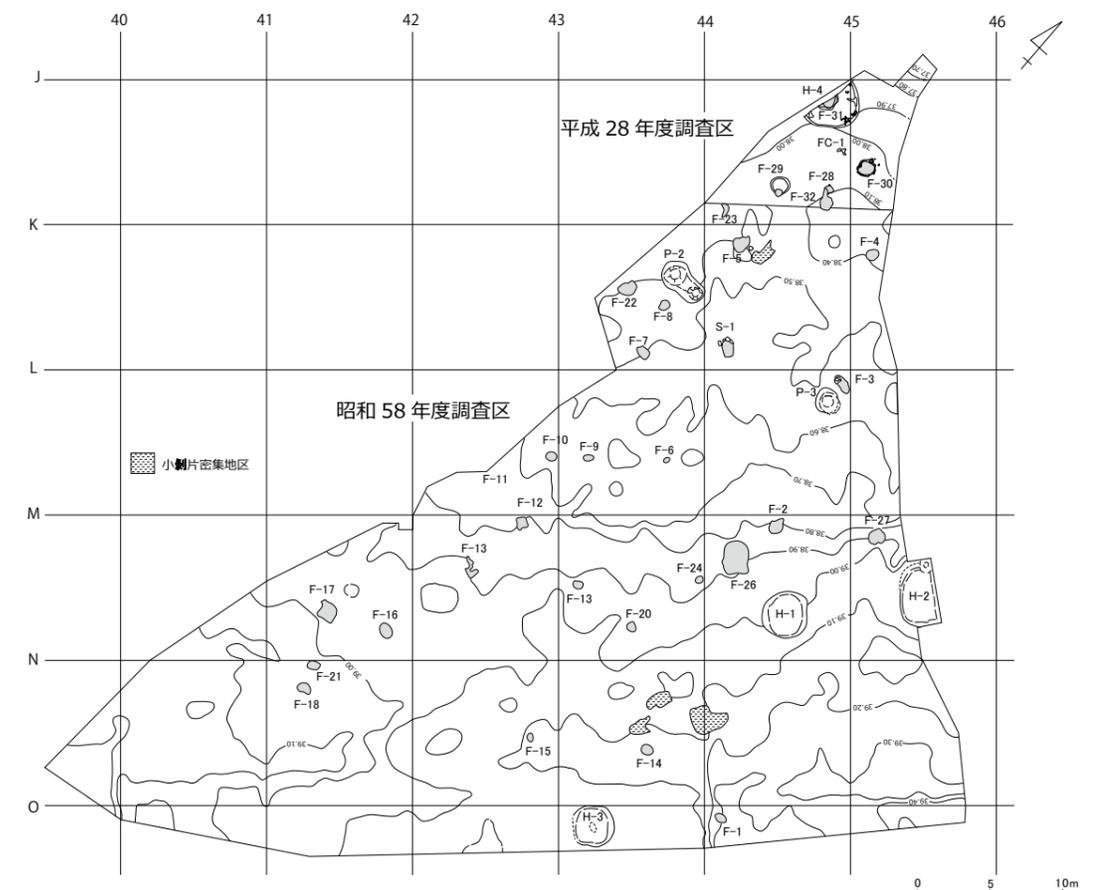
F-30・S-2 (図IV-7・8 / 表IV-1～3・5 / 図版6・8)

特徴 石囲炉である。J45b区のⅢ層を調査中に大型礫が並んで出土した。調査を進めると被熱した大型礫が円形に並んで検出された。北西側が大きな切り株の下になっていたが、木根を切断して検出した。半截して調査したところ、直径約1m、深さ約30cmの円形の掘り込みを作り、壁面に大型礫を設置したのちに埋戻していることがわかった。断面には、レンズ状に被熱した厚さ25cmほどの焼土を確認した。竪穴住居跡の炉跡である可能性を考えて周囲を精査したが、竪穴住居跡の床面や壁面は確認できなかった。F-29・31には炉石がないが、規模や掘り込みなど類似した特徴がみられる。

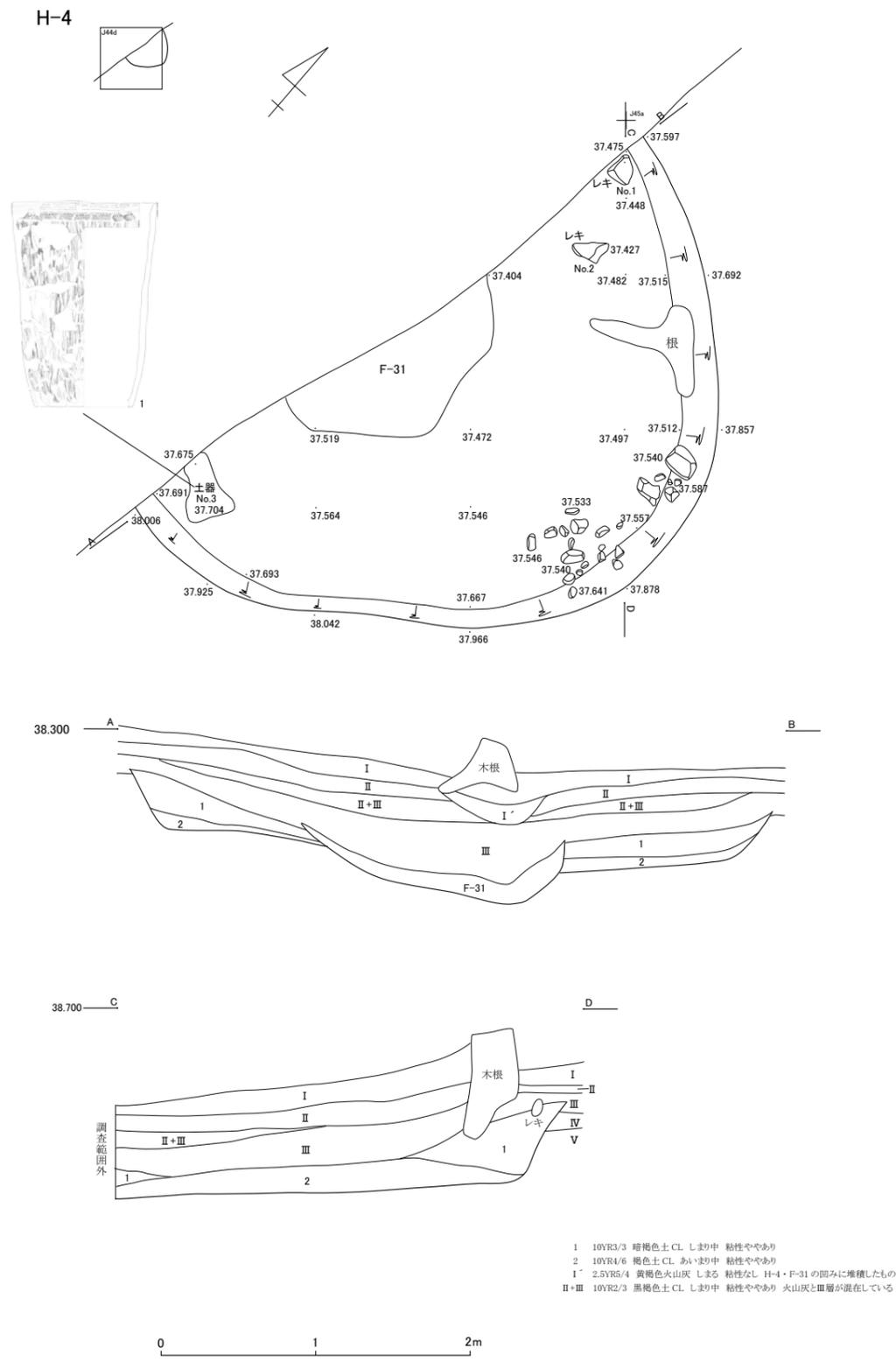
平成28年度調査 遺構位置図



昭和58年度・平成28年度調査 遺構位置図



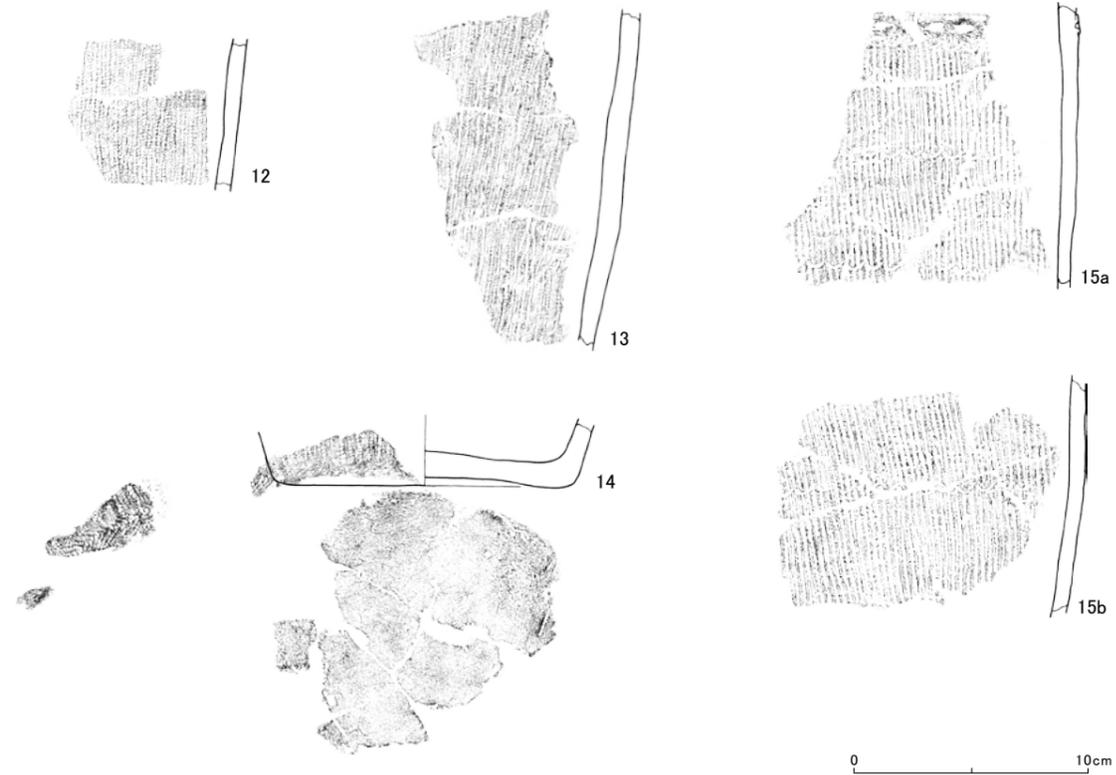
図IV-1 遺構位置図



図IV-2 H-4 (1)



図IV-3 H-4 (2)



図IV-4 H-4 (3)

遺物はⅡ群b類土器が6点、焼成粘土塊4点、周囲に配置された炉石が12点のうち2点が石皿、焼土や周辺から剥片6点、たたき石3点、礫・礫片28点が出土している。炉石の重量は総計90,160g、平均7513.33gである。各炉石については表IV-3を参照のこと。

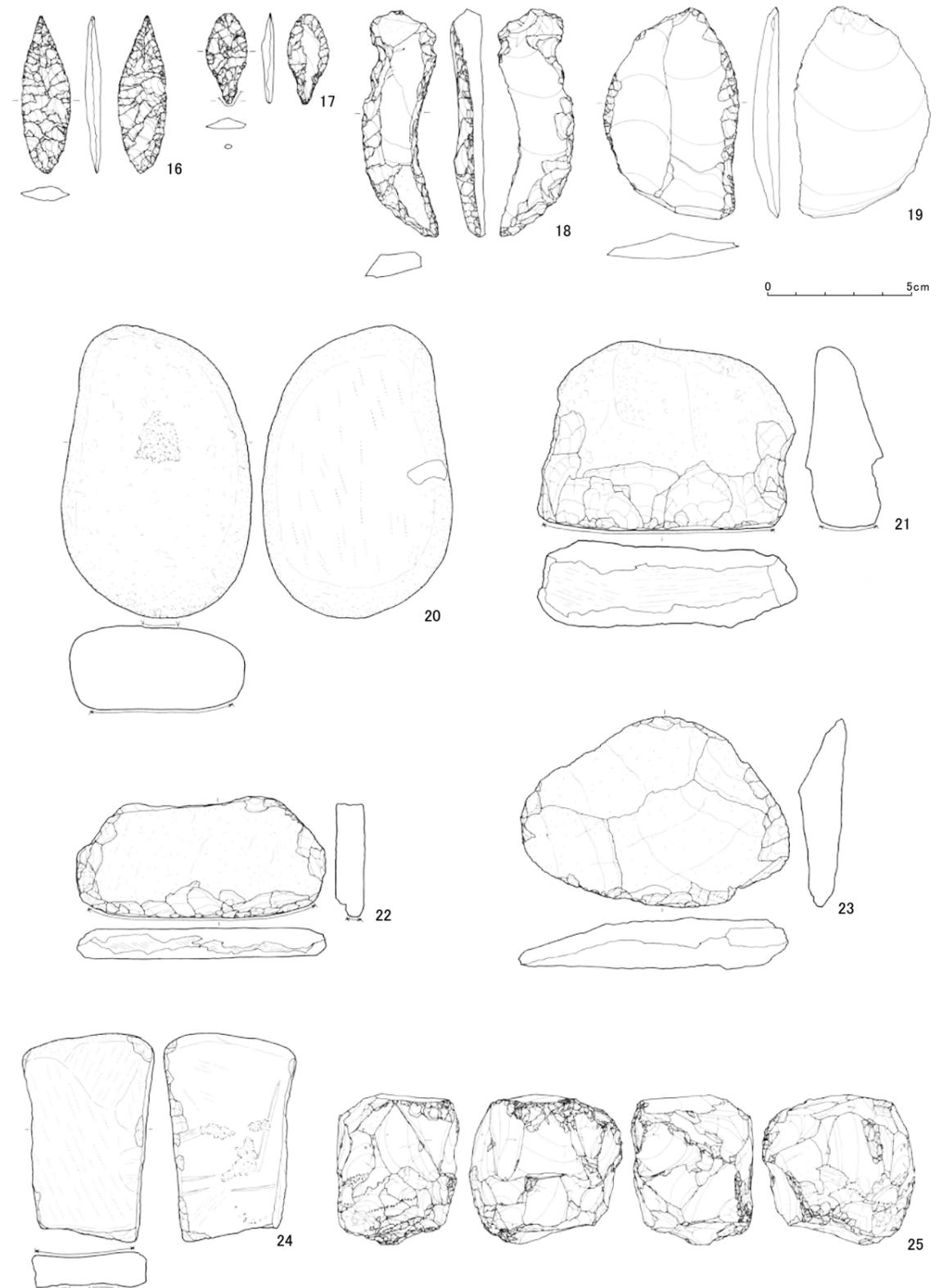
時期 焼土からフローテーションによって得られた炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行ったところ、 $2,800 \pm 30$ yrBPという測定結果を得た。測定結果では縄文時代晩期中葉だが、周囲から出土する遺物からは前期後半の可能性もある。木根による炭化材の混入の可能性も考えられる。

遺物 石器：1・2はたたき石。安山岩製。1は皿状の平坦面と下端部に敲打痕のあるもの。2は断面三角形の柱状礫の平坦面に敲打痕のあるもの。3・4は石皿。大型の扁平礫の平坦面に平坦な使用面があるもの。3は被熱痕がみられる。4は被熱によるとみられる、表面の剝落がみられる。

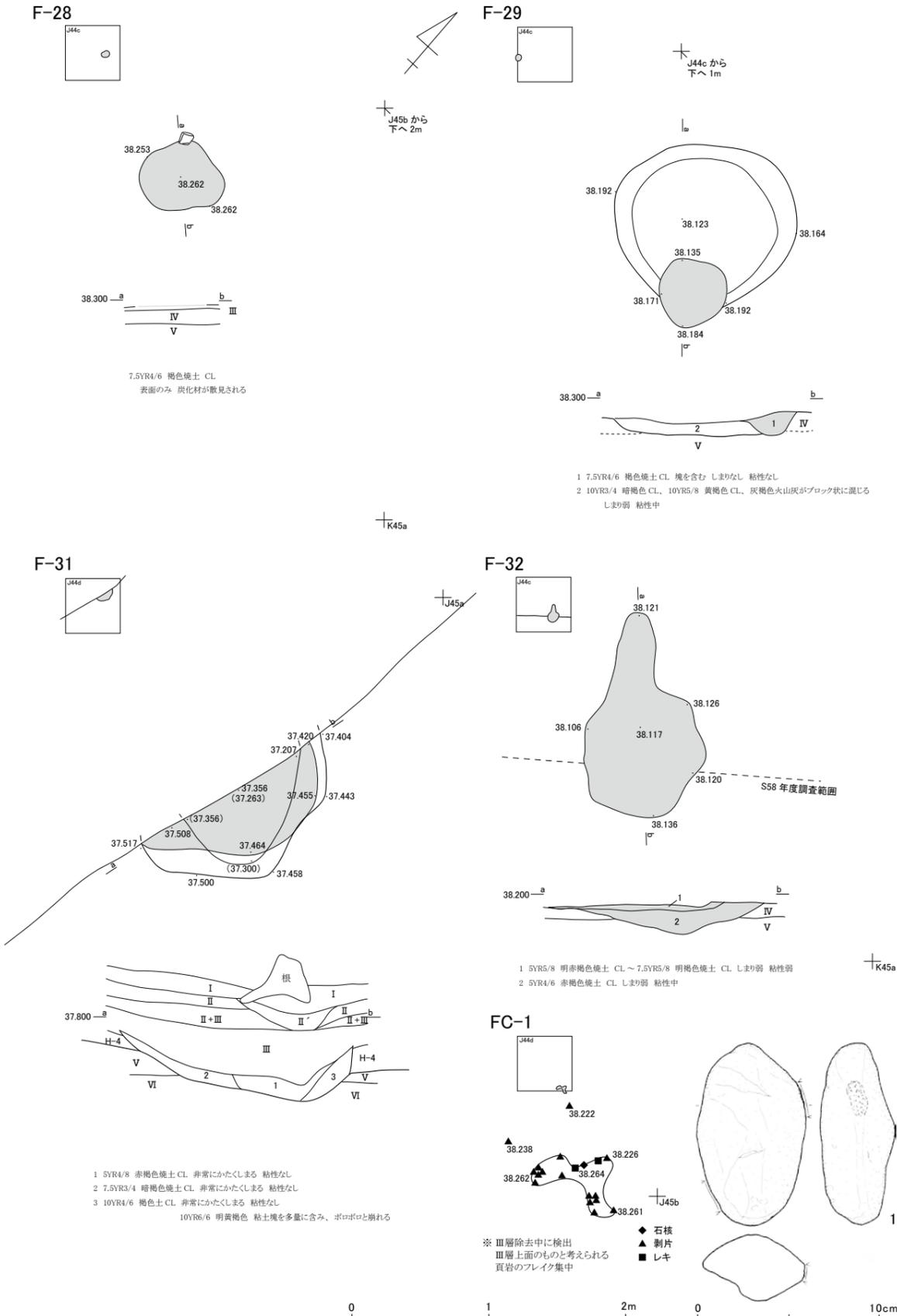
F-31 (図IV-6・8 / 表IV-1～5 / 図版7・8)

特徴 H-4を調査中に床面と同じ高さで赤褐色の焼土範囲を確認した。H-4の炉跡と考えて半截して調査したところ、レンズ状に被熱した厚さ20cmほどの焼土を確認した。H-4のセクション面で確認したところ、H-4の覆土を切って掘り込みを作り、浅く埋め戻して焼土が形成されていることが判明した。掘り込みは断面観察からⅢ層下位の時期に形成されている。掘り込みは西側半分が崩落によって失われているが、直径約1.5m、深さ約45cmの円形～楕円形と考えられる。F-29・30と類似した検出状況で、石囲炉であった可能性がある。この掘り込みを作った際に出たとみられる礫がH-4の壁際から集まって出土している。この礫はⅥ層に含まれる自然礫である。H-4が埋没途中のくぼみを利用して作られたと考えられる。遺物は、埋め戻された覆土中からⅡ群b類土器3点、石錐1点、Uフレイク1点、剥片28点、台石1点、被熱礫が3点、礫・礫片10点が出土している。

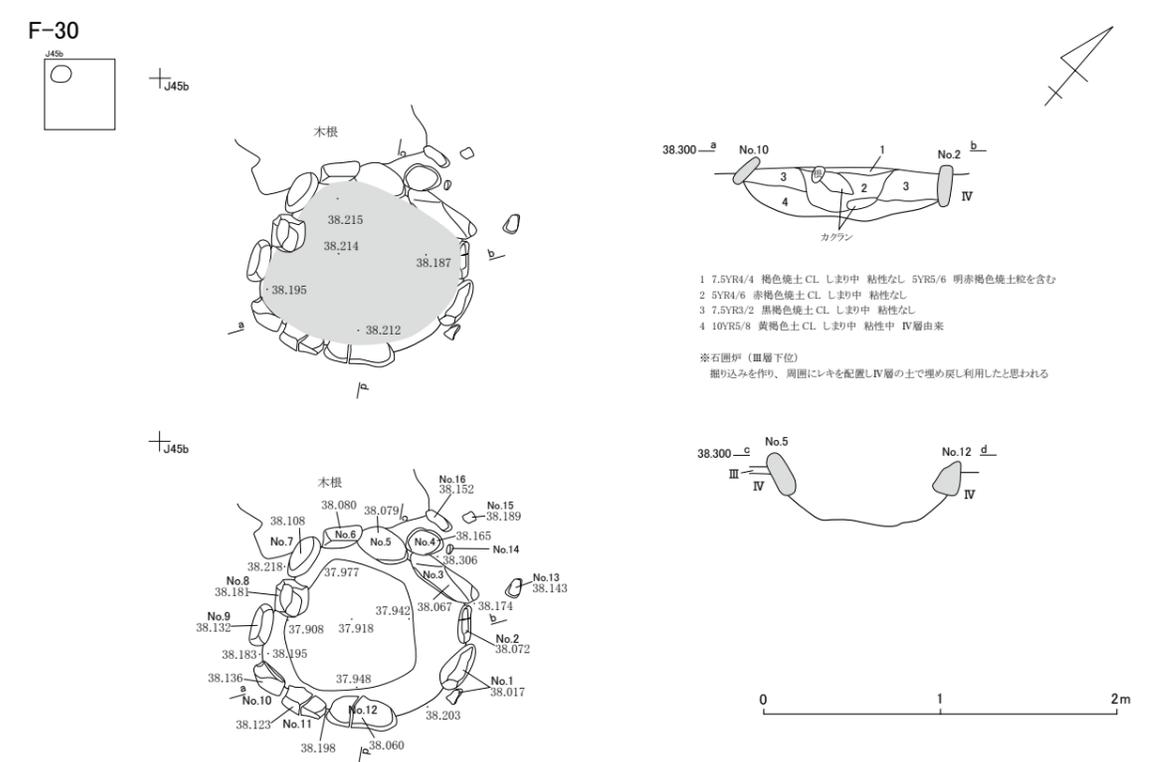
時期 焼土からフローテーションによって得られた炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行った



図IV-5 H-4 (4)



図IV-6 F-28・29・31(1)・32、FC-1



図IV-7 F-30(1)

ところ、4,680±30yrBPという測定結果を得た。この結果や周囲から出土する遺物から縄文時代前期後半と考えられる。

遺物 土器：1・2はII群b-4類土器。1は口縁部破片。無文地の幅の狭い口頸部文様帯には縄線文が施されている。2は底部破片。上げ底で体部には単軸絡条体の回転文が施されている。

石器：3は石錐。スクレイパーを転用して端部に機能部を設けている。先端部分が欠損している。再調整によって棒状の機能部を作出していることや使用痕とみられる光沢痕が確認できることから石錐と判断した。4は台石。垂円礫に敲打痕がみられる。被熱しており、炉石の可能性もある。

F-32 (図IV-6 / 表IV-1 / 図版7)

特徴 J44c区のIV層を調査中に明赤褐色の焼土範囲を確認した。検出を進めると昭和58年度調査範囲まで広がったことから、一部拡張して調査を行った。半截して調査したところ、レンズ状に被熱した厚さ25cmほどの焼土を確認した。遺物は出土していない。

時期 周辺から出土している遺物から、縄文時代前期後半と考えられる。

(3) 剥片集中

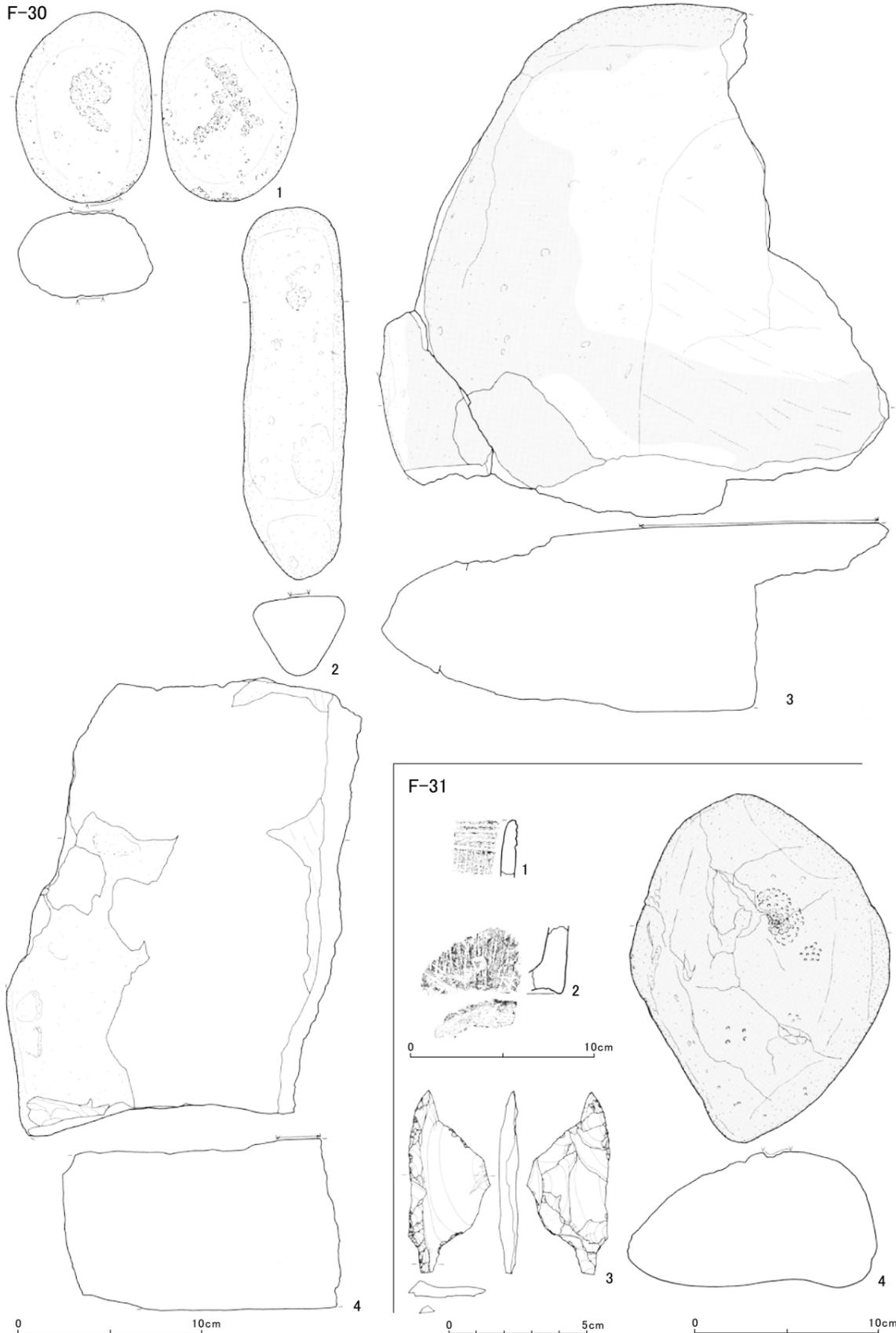
FC-1 (図IV-6 / 表IV-1 ~ 3・5 / 図版4)

特徴 J44c・d区のII層を調査中にIII層上面で頁岩の剥片が集まって出土する範囲を確認した。遺物は剥片11点、たたき石1点、礫1点が出土している。

時期 時期を判断する遺物が出土していないので不明である。

遺物 石器：1はたたき石。扁平な棒状礫の側縁端部に敲打痕がみられる。砂岩製。

(酒井)



図IV-8 F-30 (2)・31 (2)

表IV-1 遺構規模一覧

遺構種別	遺構名	調査区	規模 (m)				形状	長軸方向	時期 (縄文時代)	特徴	図番号	図版番号
			上端 長軸	上端 短軸	下端 長軸	下端 短軸						
竪穴住居跡	H-4	J 44d・J 45a	(4.06)	(2.16)	(3.80)	(1.94)	(0.64)	円形～楕円形	不明	前期後半	西側半分は崩落	図IV-2～5 図版5・8
石囲炉・焼土	F-28	J 44c	0.64	0.56	—	—	—	亜円形	—	前期後半	石囲炉? 掘り込みあり	図IV-6 図版7
	F-29	J 44bc	0.50	0.50	—	—	—	亜円形	—	前期後半	石囲炉? 掘り込みあり	図IV-6 図版7
	F-30	J 45b	1.36	1.36	1.10	1.00	0.07	—	—	前期後半	石囲炉? 掘り込みあり	図IV-7・8 図版6・8
			1.14	0.96	—	—	—					
	F-31	J 44d	1.14	0.74	1.00	0.74	0.30	—	—	前期後半	石囲炉? 掘り込みあり 西側半分は崩落	図IV-6・8 図版7・8
(1.44)			(0.48)	—	—	—						
F-32	J 44c	(1.54)	(0.66)	(1.00)	(0.52)	(0.42)	—	—	前期後半	—	図IV-6 図版7	
剥片集中	FC-1	J 44cd	—	—	—	—	—	—	不明	—	—	図IV-6 図版4

表IV-2 遺構出土遺物一覧

遺構名	層位又は付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	遺構名	層位又は付属遺構名	遺物名	分類	石材	点数	
H-4	床面	礫石器	礫・礫片	安山岩	27	F-30	焼土	土器	Ⅱ群b類		4	
				泥岩	1			土製品	焼成粘土塊		3	
		小計					28	剥片石器	剥片	頁岩	6	
	覆土	土器	Ⅱ群b類				83	礫石器	礫・礫片	安山岩	7	
		土製品	焼成粘土塊				1	小計				20
		剥片石器	Rフレイク	頁岩	1		焼土直上	土製品	焼成粘土塊		1	
			Uフレイク	頁岩	2		礫石器	たたき石	泥岩	1		
			石核	頁岩	1			礫・礫片	安山岩	4		
	覆土1	剥片	頁岩	46			砂岩	1				1
		礫石器	礫・礫片	安山岩	17			泥岩	6			6
				泥岩	1		小計					13
			小計					152	壁面	石皿	安山岩	2
			土器	Ⅱ群b類				118		炉石	安山岩	13
	覆土2	土製品	焼成粘土塊				2	小計				15
		剥片石器	石鏃	頁岩	1		覆土3	土器	Ⅱ群b類			1
		スクレイパー	頁岩	1	礫石器	礫・礫片	安山岩	5				
		剥片	頁岩	4	小計					6		
礫石器		たたき石	泥岩	1	Ⅲ層	土器	Ⅱ群b類			1		
	礫・礫片	安山岩	7	剥片石器	剥片	頁岩	1					
		砂岩	1	礫石器	たたき石	安山岩	2					
		泥岩	1	小計					5			
		片麻岩	1		9				9			
		凝灰岩	2	小計					63			
	小計				139	F-31	焼土	剥片石器	剥片	頁岩	28	
Ⅲ層	土器	Ⅱ群b類			147	底面	礫石器	礫・礫片	安山岩	3		
	剥片石器	石鏃	頁岩	1		チャート	1					
		つまみ付ナイフ	頁岩	1	小計					32		
		スクレイパー	頁岩	1	壁面	礫石器	台石	安山岩	1			
		Rフレイク	頁岩	1		炉石	安山岩	3				
		Uフレイク	頁岩	2		礫・礫片	安山岩	3				
		石核	頁岩	2	小計					7		
		頁岩	47	覆土1	土器	Ⅱ群b類				3		
	礫石器	扁平打製石器	安山岩	2	剥片石器	石鏃	頁岩	1				
		砥石	砂岩	1		Uフレイク	頁岩	1				
	礫・礫片	安山岩	27	礫石器	礫・礫片	安山岩	1					
		砂岩	1	小計					1			
		泥岩	4	小計					1			
	小計				237	合計				8		
合計	土器	Ⅱ群b類			95	FC-1	Ⅲ上層	剥片石器	剥片	頁岩	11	
	土製品	焼成粘土塊			1		礫石器	たたき石	砂岩	1		
	剥片石器	剥片	頁岩	14			礫	安山岩	1			
	礫石器	扁平打製石器	安山岩	1	合計					13		
		石皿	安山岩	1	合計					13		
	礫・礫片	安山岩	15	合計					13			
	小計				127	合計				806		
	合計				683							

表IV-3 遺構出土遺物点数一覧

遺構種別	遺構名	土器分類		石器等分類														合計					
		Ⅱ群b類	石鏃	石鏃	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	石核	Rフレイク	Uフレイク	剥片	たたき石	北海道式石冠	扁平打製石器	台石	石皿	砥石		炉石(礫)	礫・礫片	土製品(焼成粘土塊)	小計	
竪穴住居跡	H-4	443	1	1	1	2		3	2	4	111	1		3		1	1			105	4	240	683
石囲炉・焼土	F-28																					0	0
	F-29																					0	0
	F-30	6									7	3				2				13	28	4	57
	F-31	3		1							1	28			1			3		10		44	47
F-32																						0	0
剥片集中	FC-1										11	1								1		13	13
合計		452	1	2	1	2	0	3	2	5	157	5	0	3	1	3	1	16	144	8	354	806	

表IV-4 遺構出土掲載土器一覧

図番号	遺構名	層位	遺物番号 (点数)	小計	合計	大きさ (cm)			部位	分類	図版番号	備考	
						高さ	口径	底部					
図IV-3-1	H-4	覆土2層	20 (5)	24 (46)	51	51	(29.9)	(20.9)	(14.3)	口縁～底部	II b-4	図版8	No.3
図IV-3-2	H-4	覆土1層	7 (24)		24	33	(12.0)	-	12.5	胴部～底部	II b	図版8	
		Ⅲ下層	13 (7)		7								
	Ⅲ層	8 (1)		1									
	Ⅳ層	6 (1)		1									
図IV-3-3	H-4	Ⅲ層	12 (5)		5	5	-	-	-	口縁部	II b-3	図版8	
図IV-3-4	H-4	Ⅲ層	12 (1)		1	5	-	-	-	口縁部	II b-3	図版8	
		覆土1層	19 (4)		4								
図IV-3-5	H-4	Ⅲ下層	14 (1)		1	1	-	-	-	口縁部	II b-3	図版8	
図IV-3-6	H-4	覆土	2 (2)		2	4	-	-	-	口縁部	II b-4	図版8	
		Ⅲ層	5 (1)		1								
	J 44 d	Ⅲ下層	5 (1)		1								
図IV-3-7	H-4	覆土	2 (1)		1	1	-	-	-	口縁部	II b-4	図版8	
図IV-3-8 a	H-4	Ⅲ層	12 (1)		1	1	-	-	-	口縁部	II b-4	図版8	
図IV-3-8 b	H-4	Ⅲ層	12 (4)		4	4	-	-	-	胴部	II b-4	図版8	
図IV-3-9	H-4	覆土	2 (1)		1	1	-	-	-	胴部	II b	図版8	
図IV-3-10 a	H-4	覆土	2 (5)		5	5	-	-	-	胴部	II b	図版8	
図IV-3-10 b	H-4	覆土	2 (8)		8	8	-	-	-	胴部	II b	図版8	
図IV-3-11	H-4	Ⅲ層	5 (1)	12 (2)	3	21	-	-	-	胴部	II b	図版8	
		覆土2層	24 (14)		14								
	J 44 c	Ⅲ下層	11 (4)		4								
図IV-4-12	H-4	覆土	2 (1)		1	1	-	-	-	胴部	II b	図版9	
図IV-4-13	H-4	Ⅲ層	14 (1)		1	3	-	-	-	胴部	II b	図版9	
		覆土1層	19 (2)		2								
図IV-4-14	H-4	Ⅲ下層	14 (7)		7	7	-	-	-	底部	II b	図版9	
図IV-4-15 a	H-4	覆土2層	10 (6)	11 (1)	7	7	-	-	-	口縁～胴部	II b-5	図版9	
図IV-4-15 b	H-4	覆土2層	20 (6)		6	6	-	-	-	胴部	II b-5	図版9	
図IV-6-1	F-31	焼土	1 (1)		1	1	-	-	-	口縁部	II b-4	図版10	
図IV-6-2	F-31	焼土	1 (1)		1	1	-	-	-	底部	II b	図版10	

表IV-5 遺構出土掲載石器等一覧

遺構名	図番号	遺物番号	層位	分類	細分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	図版番号	備考
H-4	図IV-5-16	32	覆土1層	石鏃	尖基	5.40	1.70	5.50	3.94	頁岩	図版9	
	図IV-5-17	19	覆土2層	石鏃	石鏃転用品	3.10	1.40	4.00	1.34	頁岩	図版9	
	図IV-5-18	58	覆土2層	つまみ付ナイフ	縦型	7.80	2.10	1.10	19.77	頁岩	図版9	
	図IV-5-19	40	覆土1層	スクレイパー	側縁	7.30	4.80	0.90	25.71	頁岩	図版9	
	図IV-5-20	34	覆土1層	たたき石	平坦面	15.00	9.90	4.30	765.50	泥岩	図版9	
	図IV-5-21	15	Ⅲ層	すり石	扁平打製石器	9.70	13.40	4.50	667.00	安山岩	図版9	
	図IV-5-22	22	覆土2層	すり石	扁平打製石器	6.20	12.80	1.60	221.86	安山岩	図版9	
	図IV-5-23	62	覆土2層	すり石	扁平打製石器	9.80	13.90	2.65	320.48	安山岩	図版9	
	図IV-5-24	51	覆土2層	砥石	平坦面	10.70	6.80	2.20	157.97	砂岩	図版9	
	図IV-5-25	46	覆土2層	石核		7.70	7.85	6.30	472.28	頁岩	図版9	
F-30	図IV-8-1	25	Ⅲ下層	たたき石	端部・平坦面	10.20	7.30	4.64	468.08	安山岩	図版10	No.13
	図IV-8-2	28	Ⅲ下層	たたき石	平坦面	20.00	5.60	4.91	667.50	安山岩	図版10	No.16
	図IV-8-3	13	壁面	石皿 (炉石)		(27.60)	(27.40)	(10.40)	(8780.00)	安山岩	図版10	No.1
	図IV-8-4	18	壁面	石皿 (炉石)		(19.00)	(24.70)	9.40	(7040.00)	安山岩	図版10	No.6
		14	壁面	炉石		23.20	15.80	5.35	2600.00	安山岩		No.2 被熱
		15	壁面	炉石		47.40	20.30	12.30	15300.00	安山岩		No.3 被熱
		16	壁面	炉石		20.20	16.60	10.50	4480.00	安山岩		No.4
		17	壁面	炉石		30.70	21.10	10.60	10750.00	安山岩		No.5 被熱
		19	壁面	炉石		26.80	15.80	7.79	5260.00	安山岩		No.7 被熱
		20	壁面	炉石		20.80	19.90	6.70	3250.00	安山岩		No.8 被熱
		21	壁面	炉石		24.80	12.40	9.30	4350.00	安山岩		No.9 被熱
		22	壁面	炉石		22.70	16.20	5.31	2900.00	安山岩		No.10 被熱
		23	壁面	炉石		24.70	15.40	10.30	5450.00	安山岩		No.11 被熱
		24	壁面	炉石		42.60	24.10	14.80	20000.00	安山岩		No.12 被熱
		26	Ⅲ下層	礫		4.41	3.74	2.69	55.04	安山岩		No.14
	27	Ⅲ下層	礫		6.67	4.91	2.87	128.28	安山岩		No.15	
F-31	図IV-8-3	1	覆土1層	石鏃		5.55	2.90	0.70	7.95	頁岩	図版10	
	図IV-8-4	7	壁際	台石 (炉石)		18.70	13.90	7.30	2311.50	安山岩	図版10	No.2 被熱
FC-1	図IV-6-1	2	Ⅲ上層	たたき石	側縁	9.90	5.90	4.10	260.75	砂岩	図版10	

V 包含層の調査

1 概要

今年度調査範囲は昭和58年度調査範囲の北西側に位置する。出石川左岸の舌状台地の先端部にあたり、津軽海峡線の工事によって島状に取り残された84㎡が調査範囲である。南東側が津軽海峡線に面する斜面、北東側が出石川に面する崖面、北西側が国道228号線に面する崖面、南西側が町道出石大学線に面する崖面に囲まれている。調査区は舌状台地先端部の平坦地で、標高は37～38m、周辺との比高差は15～17mである。

包含層からは土器2,265点、石器等977点、合計3,242点が出土した。主な出土層位はⅢ層とⅣ層である。土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層式(Ⅱ群b類土器)のものが2,152点とほとんどを占める。石器は剥片石器ではスクレイパー、礫石器ではたたき石、扁平打製石器が多く出土している。

2 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図V-1・2-1～32/表V-3/図版11・12)

1～27はⅡ群b類土器、28～32はⅢ群a類土器。1・3・4はⅡ群b-3類土器、2・6～18・20～22はⅡ群b-4類土器、5・19はⅡ群b-5類土器である。

1は平縁のバケツ型のもので底部は破損している。幅の広い無文地の文様帯、体部には単軸絡条体の回転文が施されている。3・4は口縁部破片。口縁部直下に1条の縄線文を施し、口頸部文様帯に横走る直前段反燃による縄文が施される。

2は平縁で幅の狭い口頸部には片方の撚りがほどけた結束羽状縄文が2段施されている。体部には複節の縦走気味の縄文と片方の撚りがほどけた結束羽状縄文が組み合わされて施されている。6～18は口縁部破片。6は口頸部に結束羽状縄文が地紋として施され、口唇部に3条の縄線文、口頸部文様帯下端に5条の縄線文が施されている。内面はツルツルに磨かれている。7は幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯には単軸絡条体1A類の回転文が施されている。体部は単軸絡条体の回転文である。内面はツルツルに磨かれている。8は幅の狭い口頸部文様帯下端を微隆線と結束羽状縄文で区画し、文様帯には3条の縄線文が施されている。9～12は幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯には2条の縄線文が施されている。11・12は体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が組み合わされて施されている。同一個体の可能性がある。13は幅の狭い口頸部文様帯下端を結束第2種の羽状縄文で区画し、無文地の文様帯には4条の縄線文が施されている。14は幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、無文地の文様帯には4条の縄線文が施されている。15は幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文とみられる文様で区画し、無文地の文様帯には2本一組の縄線文が2条施されている。16は幅の狭い口頸部文様帯に2本一組の組紐状の縄線文が3条施されている。17は口縁部が緩い波状になるとみられる。地紋が結束羽状縄文の口頸部に2本一組の組紐状の縄線文が2条施され、波頂部から垂下する結束羽状縄文の原体の圧痕文を施している。18は口縁部が緩い波状になるとみられる。幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯には2本一組の組紐状の縄線文が2条施されている。体部には結束羽状縄文と自縄自巻の回転文を組み合わせて施している。20は口頸～胴部破片。20は口頸部文様帯を区画していないもの。文様帯には2本一組の組紐状の縄線文が3条以上施されている。体部には2本一組の単軸絡条体の回転文が施されている。

21は胴部～底部破片。体部には結束第2種の羽状縄文と単軸絡条体の回転文を組み合わせて施されている。非常に細い原体を用いている。Ⅱ群b-4類土器と考えられる。22は胴部破片。単軸絡条体の回転文が施されている。

5は口縁部破片。口頸部文様帯に単軸絡条体の圧痕文が施されている。19は口縁～胴部破片。口縁部はわずかに波状をしており、幅のやや狭い口頸部文様帯を区画していないもの。幅のやや狭い無文地の文様帯に7条の縄線文が施され、波頂部直下で山形になっている。体部は単軸絡条体の回転文と結束第2種の羽状縄文を組み合わせて施されている。

23は胴部破片。単軸絡条体第5類の回転文が施されているもの。Ⅱ群b-2類の可能性ある。

24～27は底部破片。上げ底気味の底部である。27は底面にも単軸絡条体の回転文が施されている。

28・29は口縁部破片。28は小突起をもつ波状口縁とみられる。口唇・口頸部文様帯下端の貼付帯と波頂部から垂下する1条の貼付帯に縄の圧痕が施されている。無文地の口頸部文様帯には2本一組の縄線文2条で区画され、「X」字状と鋸歯状の押圧が施文されている。29は口縁の波頂部破片。口唇に縄の圧痕が施され、口頸部文様帯には縄線文と単軸絡条体の圧痕文が施されている。30は胴部破片。結束羽状縄文が施されている。31は底部破片。30・31は同一個体の可能性がある。

(2) 石器等 (図V-3～8-1～51／表V-5／図版13～17)

石鏃 (図V-3-1・2／表V-5／図版13)

石鏃は3点が出土し、2点を掲載した。有茎鏃1点、尖基2点で、頁岩製2点、黒曜石製1点である。1は有茎鏃で凸基のもの。主剥離面が残存し、剥片の周縁を加工して形状を作り出している。頁岩製。2は尖基のもの。柳葉形で細身である。黒曜石製。

石槍

石槍は1点が出土した。刃部の破片で掲載していない。頁岩製である。

石錐 (図V-3-3／表V-5／図版13)

石錐は1点が出土し、1点を掲載した。3は石鏃状の形状をしているもの。有茎鏃凸基の形状をしており、尖頭部を使用している。厚みがあることや尖頭部が曲がっていることから、転用品ではないと考えられる。頁岩製。

つまみ付ナイフ (図V-3-4・5／表V-5／図版13)

つまみ付ナイフは7点が出土し、2点を掲載した。すべて縦型で片面加工のもので、4点は下半部を欠損した破片である。すべて頁岩製。

4・5は縦型で片面加工のもの。腹面に使用痕とみられる光沢が確認できる。4は縦長剥片の側縁を加工してつまみ部と外彎する刃部を作出している。5は縦長剥片の周縁を加工してつまみ部と直線的な刃部を作出している。

スクレイパー (図V-3-6～14／表V-5／図版13)

スクレイパーは26点出土し、9点を掲載した。ヘラ状のもの1点、縦長剥片を利用したもの13点、横長剥片を利用したもの2点、破片10点である。すべて頁岩製。

6はヘラ状のもの。縦長剥片の下端部を加工して急角度の刃部を作出している。7～12は剥片の側縁に外彎する刃部を作出したもの。7～11は縦長剥片のもの。9・10は端部にも急角度の刃部が作出されている。12は横型剥片のもの。7は腹面、8・9は両面に使用痕とみられる光沢が確認できる。13は縦長剥片の周縁を加工して外彎する刃部と内彎する刃部を側縁に作出している。腹面の側縁に使用痕とみられる光沢が確認できる。14はトランシェ様石器の形状をしたもの。両側縁に直線状の刃部

を作出し、下端部には微細な剥離がみられる。腹面の側縁に使用痕とみられる光沢が確認できる。

両面調整石器 (図V-3-15／表V-5／図版13)

両面調整石器は2点が出土し、1点を掲載した。尖頭器状のもの1点、尖頭器状とみられる破片1点である。いずれも頁岩製。15は尖頭器状のもの。横長剥片を粗く調整して尖頭器状に整形している。整形途中で2つに折損している。

石斧 (図V-4-16／表V-5／図版13)

石斧は1点出土し、1点を掲載した。16は短冊形で両刃の円刃。基部を折損している。全面を研磨によって調整している。砂岩製。

たたき石 (図V-4-17～26／表V-5／図版13・14)

たたき石は20点出土し、10点を掲載した。安山岩製14点、砂岩製2点、片麻岩製2点、泥岩製1点、チャート製1点である。

17は扁平な棒状礫の平坦面に敲打痕のあるもの。18・19は扁平な亜円礫の端部に敲打痕のあるもの。20は棒状礫の両端部に敲打痕のあるもの。21は扁平な楕円礫の平坦面と両端部に敲打痕のあるもの。22は棒状礫の平坦面と端部に敲打痕のあるもの。23・24は扁平な棒状礫の平坦面と端部に敲打痕のあるもの。25は亜円形礫の周縁に敲打痕のあるもの。26は扁平な棒状礫の両端部と側縁に敲打痕のあるもの。17～23・25は安山岩製、24は片麻岩製、26は泥岩製。

凹み石 (図V-4-27～30／表V-5／図版14)

凹み石は6点出土し、4点を掲載した。断面円錐形の凹みのあるもの4点、浅い凹みのあるもの2点である。泥岩製4点、砂岩製2点である。

27は楕円礫の平坦面に円形で断面円錐状の凹みがあるもの。28は棒状礫の平坦面に断面円錐形の凹みがあるもの。円形で直径2cmほどのもののほかに、直径0.5cmほどのものが多数みられる。側縁に敲打痕が確認できる。29・30は扁平な楕円礫の平坦面に不定形の浅い凹みのあるもの。27・29は泥岩製、28・30は砂岩製。

すり石 (図V-5-31～41／表V-5／図版14)

すり石は19点が出土した。北海道式石冠2点、扁平打製石器17点である。北海道式石冠2点、扁平打製石器6点を掲載した。北海道式石冠は2点とも安山岩製、扁平打製石器は安山岩製15点、凝灰岩製1点、頁岩製1点である。

31・32は北海道式石冠。31は右半分を折損している。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は短軸方向にわずかに傾斜している。32は下半部を折損している。敲打によって握部を作出している。いずれも安山岩製。

33～41は扁平打製石器。33～36は半円状で、弦の部分に幅の非常に狭い使用面を作出しているもの。33～35は板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形している。36は扁平な楕円礫の下半長辺を直線状に打ち欠いて半円状に整形している。37～41は端部に抉りがあり、下長辺に幅の狭い使用面を作出しているもの。37・39は板状礫、38は扁平礫を打ち欠いて隅丸長方形状に整形している。37・38は半分を折損している。39・40は扁平礫を打ち欠いて直線状の機能部を作出し、端部に抉りを設けている。41は板状礫を打ち欠いて半円状に整形し、端部に抉りを設けている。すべて安山岩製。

台石 (図V-5・6-42・43／表V-5／図版15)

台石は4点出土し、2点を掲載した。すべて安山岩製。

42は扁平礫の平坦面に敲打痕のみみられるもの。左半部を欠損しており、被熱している。石囲炉の炉石として使用された可能性がある。43は扁平な大型礫の平坦面を使用したとみられるもの。明確な使

用痕は確認できなかったが、全面が被熱し、黒色や赤色の付着物がみられた。表面の一部が被熱によって剥落している。

石皿 (図V-7-44~46/表V-5/図版15・16)

石皿は3点出土し、3点を掲載した。すべて安山岩製。

44~46は扁平礫の平坦面に平坦なすり面のあるもの。44・45は破片で被熱している。44は敲打による調整後にすり面を形成している。45は被熱によって表面の剥落が激しい。46は大型の扁平礫を使用しており、敲打による調整後に平坦なすり面を形成している。

石核 (図V-8-47/表V-5/図版17)

石核は5点出土し、1点を掲載した。47は頁岩の拳大の亜円礫を打ち欠いたもの。また、2点については剥片と接合したことから、52の接合資料の方で掲載している。

土製品 (図V-8-48~50/表V-5/図版17)

土製品は90点が出土した。焼成粘土塊87点、擦切土器片3点で、擦切土器片3点を掲載した。

48~50は擦切土器片。48はII群b-4類土器の口縁部破片の両側縁を擦り切って短冊状に整形したもの。幅の狭い口頸部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯には2本一組の組紐状の縄線文が2本施されている。体部には単軸絡条体の回転文が施されている。49・50はII群b類土器の胴部破片を利用したもの。49は両側縁を擦り切って正方形に整形したもの。体部には単軸絡条体の回転文が施されている。50は左下端部を欠損しているが、左側縁を擦り切って正方形に整形したものと考えられる。体部には結束羽状縄文と単軸絡条体の回転文が組み合わされて施されている。

石製品 (図V-8-51/表V-5/図版17)

石製品は1点出土し、線刻礫1点を掲載した。51は線刻礫の破片。泥岩の扁平な楕円礫の平坦面に細い直線状の線刻がみられる。

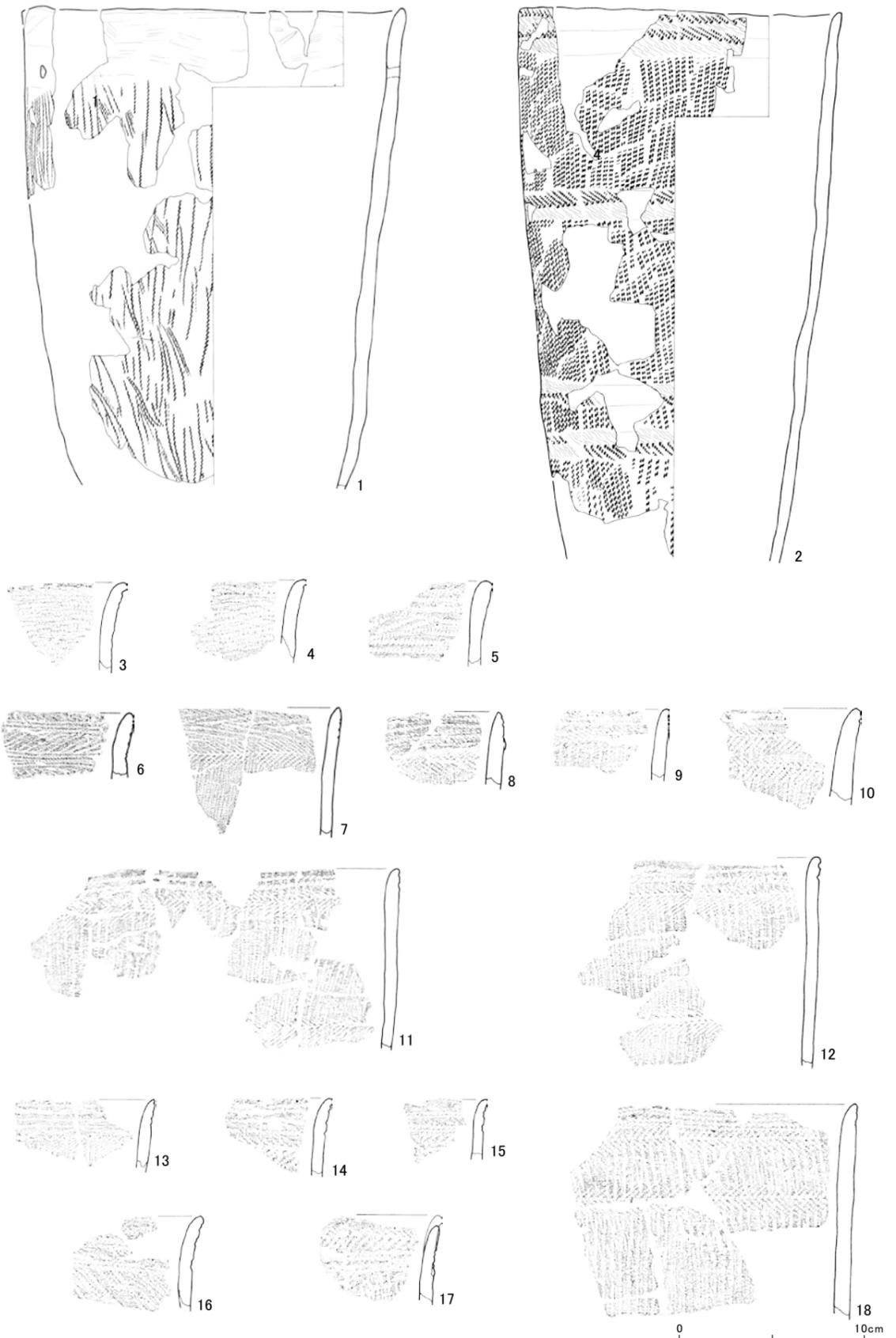
礫・礫片

礫・礫片は395点出土している。石材では安山岩が279点と最も多く約70%を占める。次いで泥岩53点、チャート15点、凝灰岩14点等となる。拳大以下の大きさのものが多く、大きなものでは長さ48cm・重さ12.5kgのものが出土した。特に使用された痕跡がなかったことから礫としたが、台石として利用された可能性はある。被熱しており、炉石として使用されていた可能性もある。VI層には拳大の礫が含まれることから、遺物包含層中に拳大以下の大きさの礫が多く出土した可能性がある。

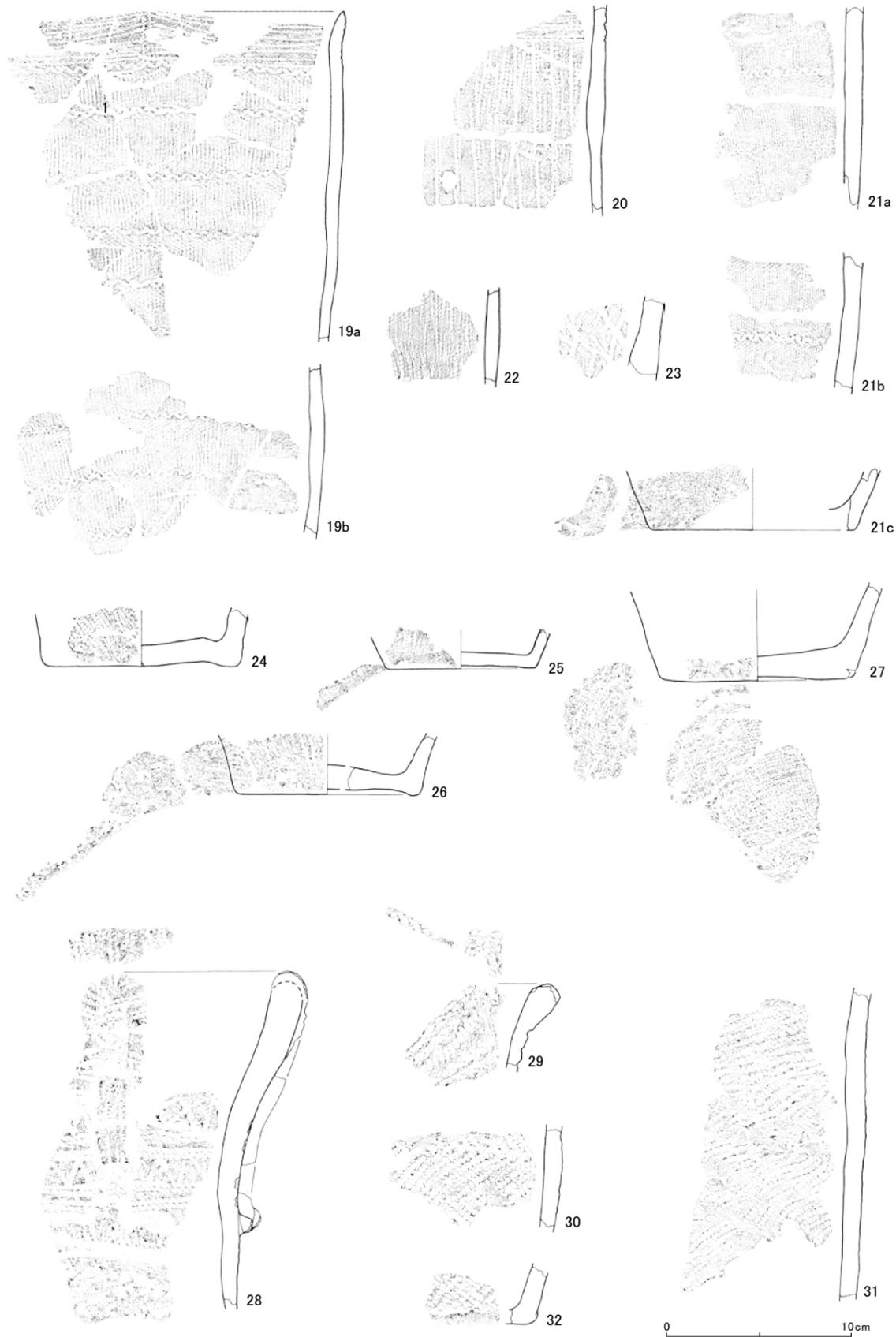
接合資料 (図V-8-52/表V-5/図版17)

1点を掲載した。52は石核2点、剥片10点が接合したもの。頁岩の拳大の楕円礫を打ち欠いて、大きめの剥片を取り出している。剥片が利用された痕跡はみられなかった。

(酒井)



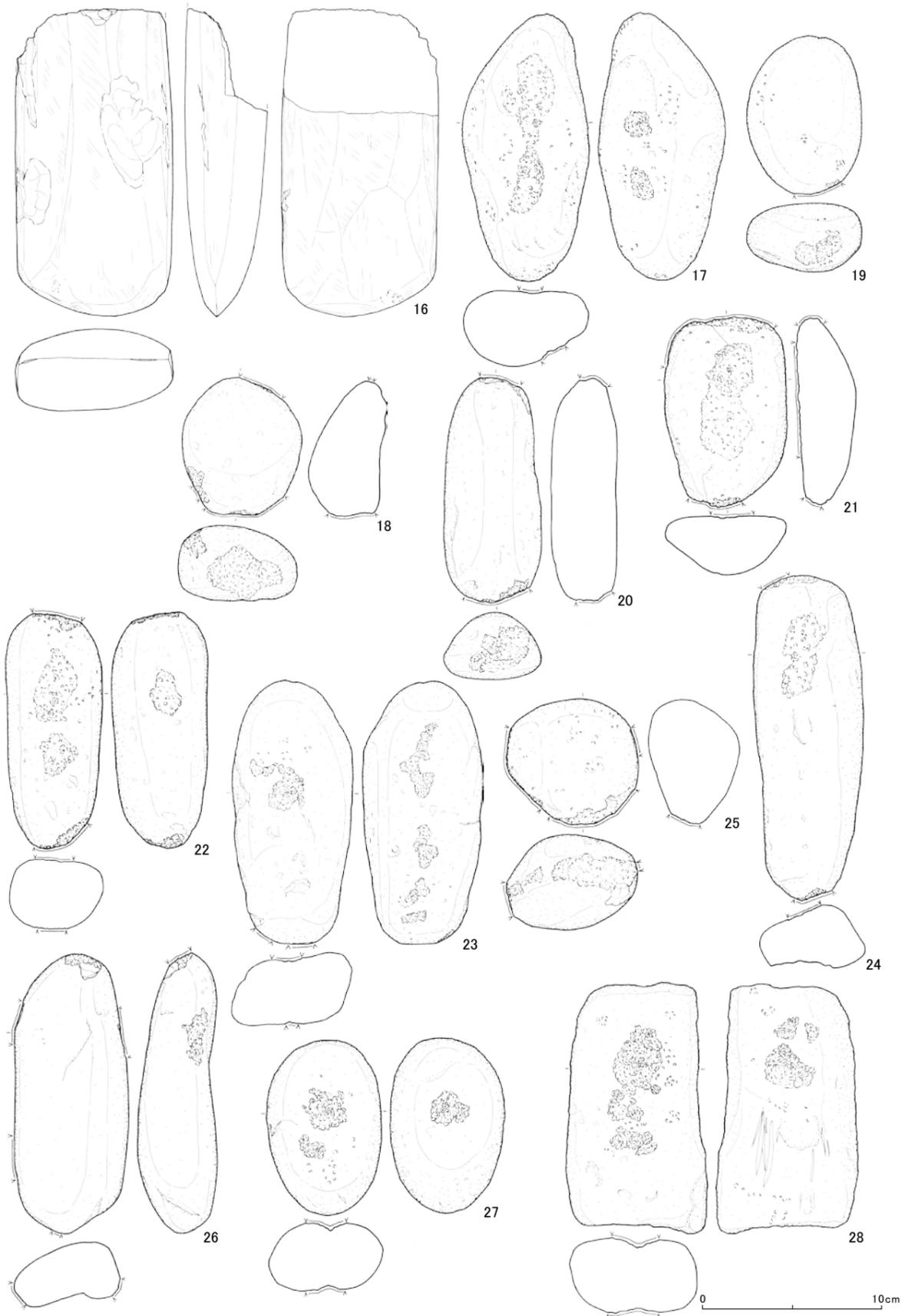
図V-1 包含層出土土器(1)



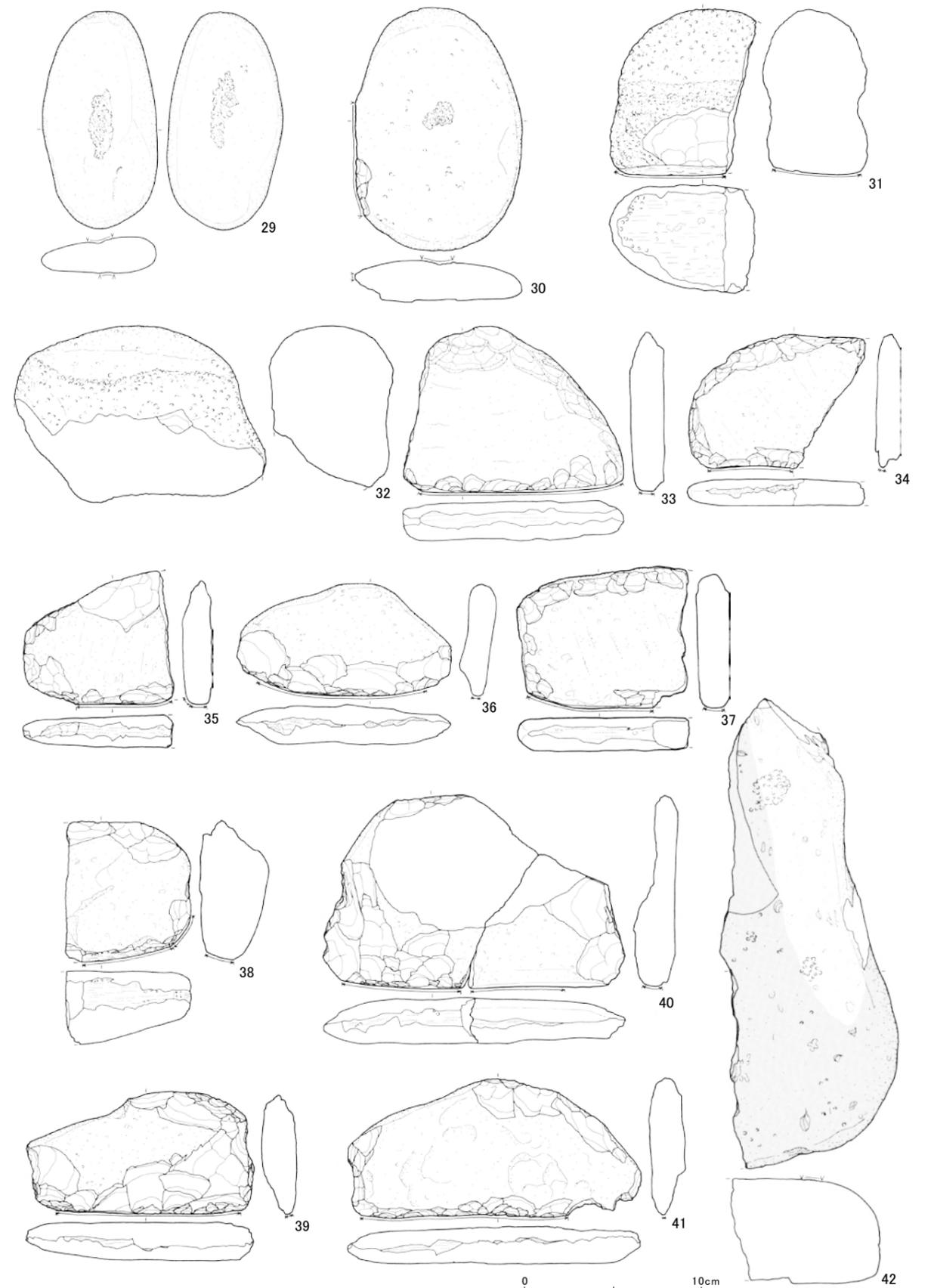
図V-2 包含層出土土器(2)



図V-3 包含層出土石器(1)



図V-4 包含層出土石器(2)



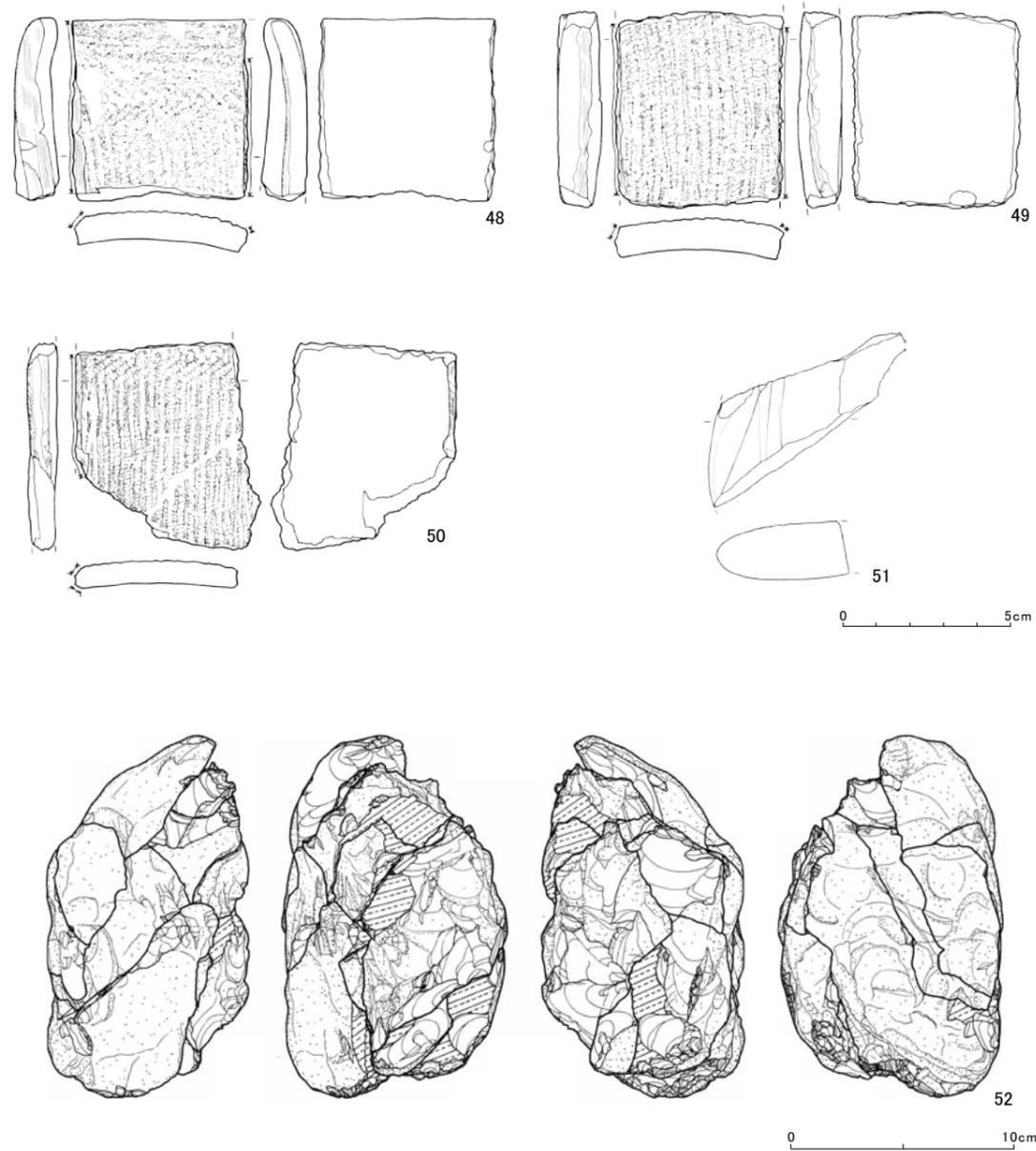
図V-5 包含層出土石器(3)



図V-6 包含層出土石器(4)

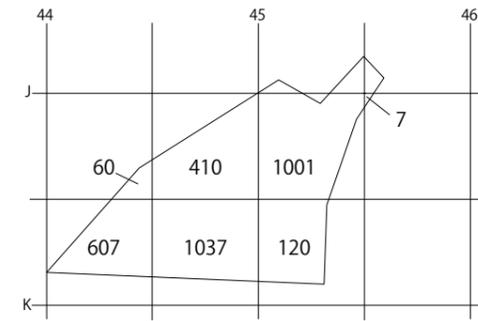


図V-7 包含層出土石器(5)

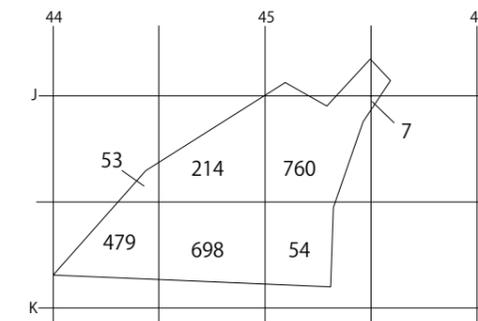


図V-8 包含層出土土製品・石製品・接合資料

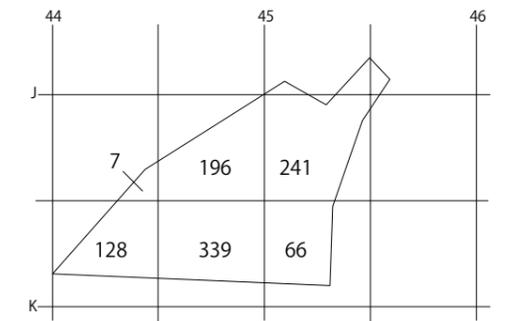
総点数 3,242 点



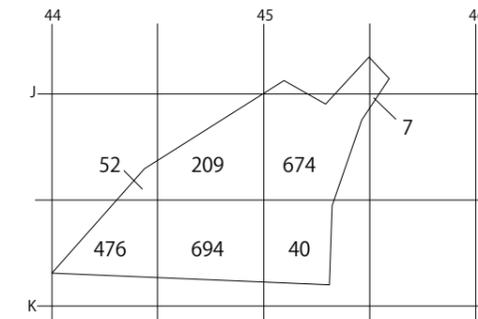
土器 総計 2,265 点



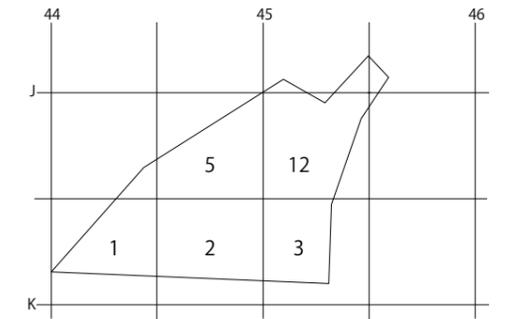
石器 総計 977 点



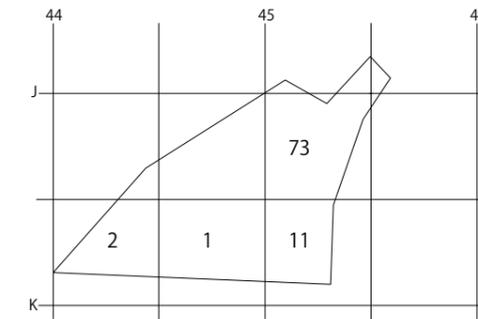
Ⅱ群 b 類土器 計 2,152 点



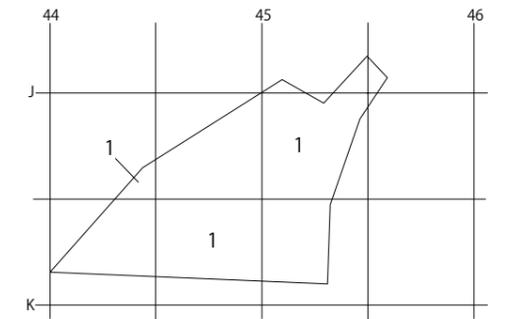
Ⅲ群 a 類土器 計 23 点



焼成粘土塊 計 87 点

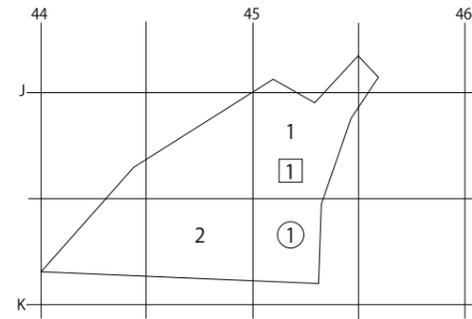


擦切土器片 計 3 点

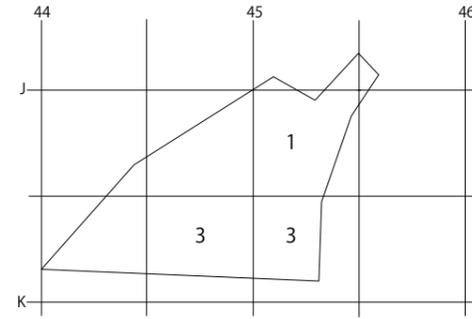


図V-9 包含層出土遺物分布図(1)

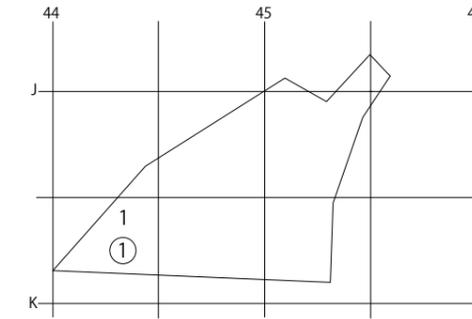
石鏃 計3点、石錐 計1点○、石槍 計1点□



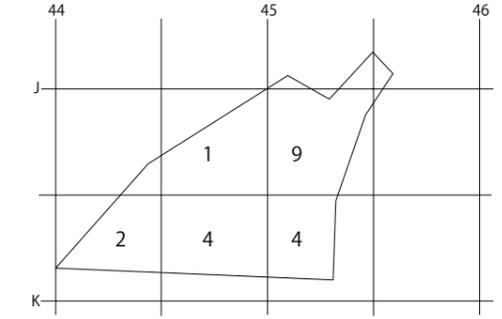
つまみ付ナイフ 計7点



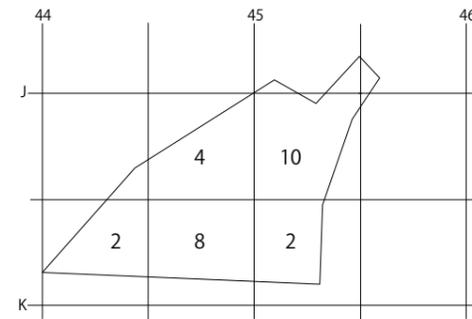
石斧 計1点、砥石 計1点○



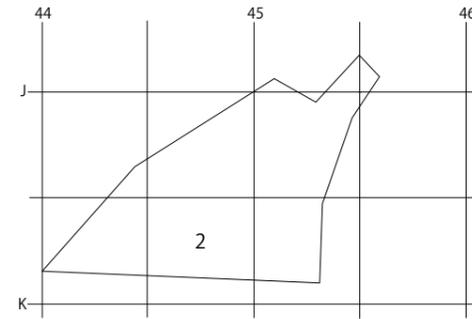
たたき石 計20点



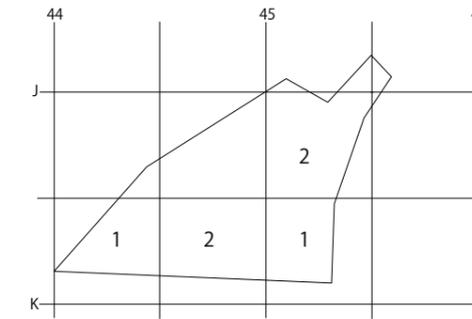
スクレイパー 計26点



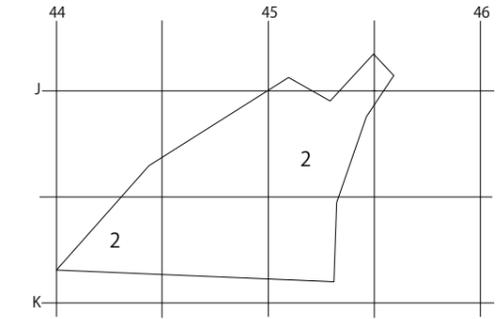
両面調整石器 計2点



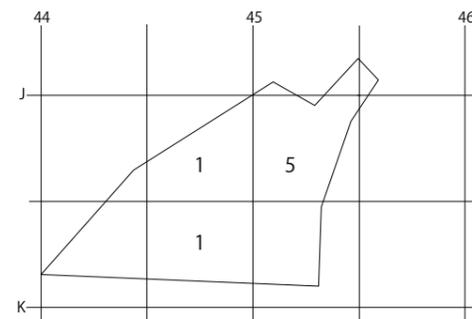
凹み石 計6点



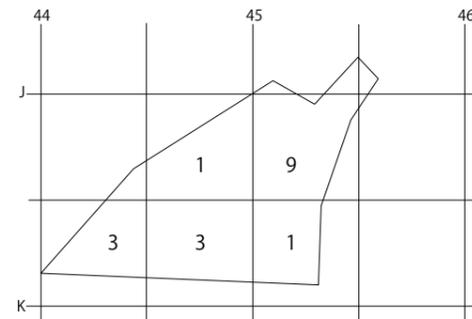
台石 計4点



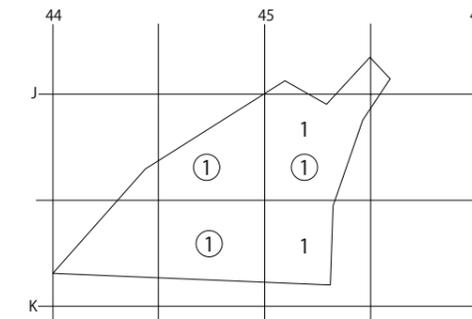
Rフレイク 計7点



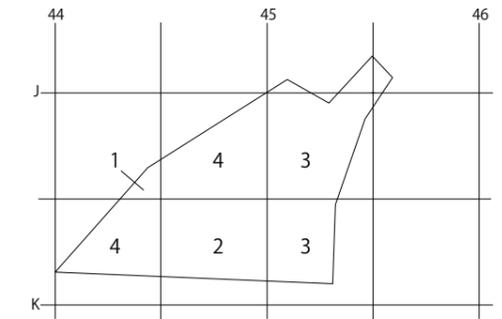
Uフレイク 計17点



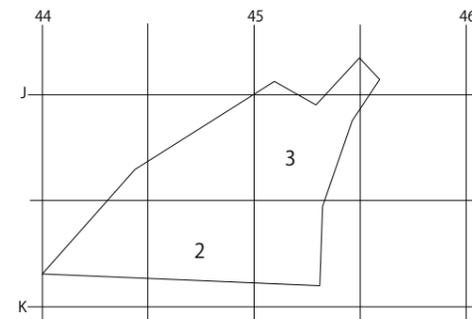
北海道式石冠 計2点、石皿 計3点○



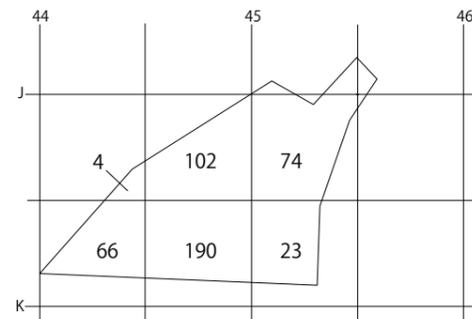
扁平打製石器 計17点



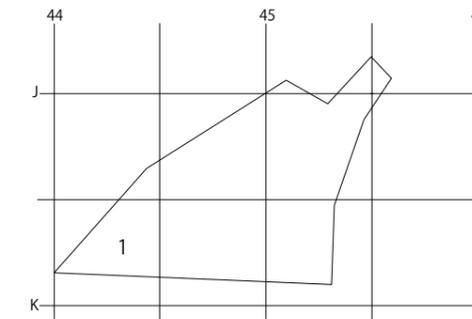
石核 計5点



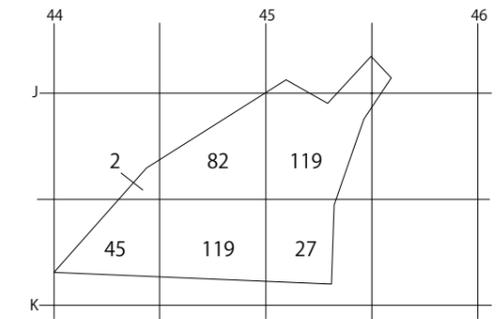
剥片 計459点



線刻礫 計1点



礫・礫片 計394点



図V-10 包含層出土遺物分布図(2)

図V-11 包含層出土遺物分布図(3)

VI 自然科学的分析

1 湯の里2遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

湯の里2遺跡は、北海道上磯郡知内町湯ノ里66番2（北緯41° 35′ 57.51741″、東経140° 19′ 54.19887″）に所在する。測定対象試料は、石囲炉・焼土から出土した炭化物2点である（表VI-1）。

2 測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表VI-1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表VI-1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表VI-1に、補正していない値を参考値として表VI-2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、

試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表VI-1に、補正していない値を参考値として表VI-2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1 σ =68.2%)あるいは2標準偏差(2 σ =95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表VI-2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表VI-1・2に示す。

試料の¹⁴C年代は、YS2-1が2800±30yrBP、YS2-2が4680±30yrBPである。暦年較正年代(1 σ)は、YS2-1が縄文時代晩期中葉頃、YS2-2が縄文時代前期後半で円筒土器下層d式期頃の測定事例が示す年代値に重なる頃に相当する(小林編2008)。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表VI-1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161426	YS2-1	F-30 焼土	炭化物	AAA	-27.23 ± 0.48	2,800 ± 30	70.57 ± 0.23
IAAA-161427	YS2-2	F-31 焼土	炭化物	AAA	-26.60 ± 0.50	4,680 ± 30	55.84 ± 0.20

[#8249]

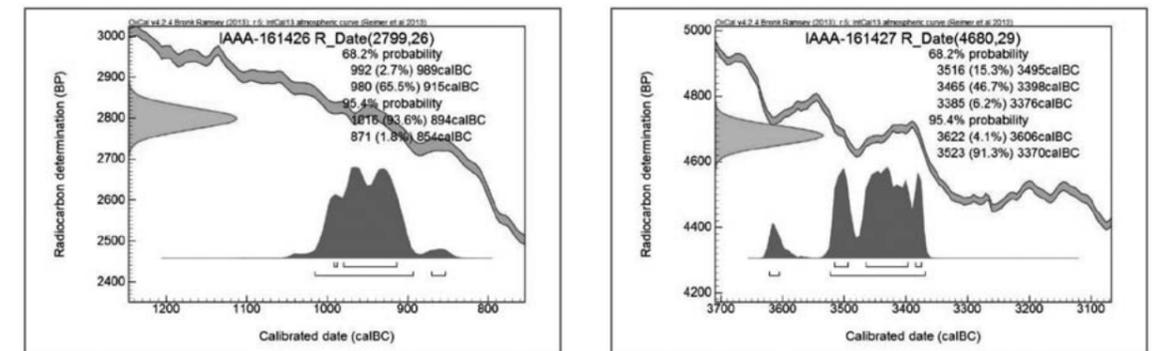
表VI-2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161426	2,840 ± 30	70.25 ± 0.22	2,799 ± 26	992calBC - 989calBC (2.7%) 980calBC - 915calBC (65.5%)	1016calBC - 894calBC (93.6%) 871calBC - 854calBC (1.8%)
IAAA-161427	4,710 ± 30	55.66 ± 0.19	4,680 ± 29	3516calBC - 3495calBC (15.3%) 3465calBC - 3398calBC (46.7%) 3385calBC - 3376calBC (6.2%)	3622calBC - 3606calBC (4.1%) 3523calBC - 3370calBC (91.3%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



図VI-1 暦年較正年代グラフ (参考)

Ⅶ 総 括

1 遺構（図Ⅶ-1、表Ⅶ-1・2）

今年度調査範囲からは竪穴住居跡 1 軒、石囲炉・焼土 5 か所、剥片集中 1 か所を検出した。昭和58年度調査では竪穴住居跡 3 軒、土坑 3 基、石囲炉 1 か所、焼土 27 か所が検出されている。竪穴住居跡は 4 軒とも長軸 3～4 m ほどの隅丸方形や楕円形の小型のもので、縄文時代前期後半と考えられる。すべて柱穴はみられない。仮小屋的なものと考えられる。石囲炉は 2 か所、石囲炉の可能性のあるもの 2 か所である。今回検出した石囲炉（F-30・S-2）は中～大型の礫石器や礫片を直径 1 m ほどの円形に並べたものである。放射性炭素年代測定では、 $2,800 \pm 30$ yrBP で晩期中葉との結果であった。周辺から出土する遺物からは前期後半とも考えられる。前回調査で石囲炉（S-1）を中期前半としていたが、放射性炭素年代測定結果や周囲の遺物出土状況からすると、晩期中葉もしくは前期後半のものである可能性がある。周辺では湯の里 6 遺跡で晩期中葉の石囲炉が検出されている。

2 遺物（表Ⅶ-1）

今年度調査範囲からは遺構出土のものも合わせると土器 2,725 点、石器等 1,323 点、合計 4,048 点の遺物が出土した。土器は縄文時代前期後半（Ⅱ群 b 類土器）が 2,604 点（95.6%）出土している。円筒土器下層 c・d 式が大半を占め、とくに円筒土器下層 d₁ 式が多く出土している。このほか、中期前葉（Ⅲ群 a 類土器）の円筒土器上層 a 式土器が少量出土している。昭和58年度調査においては土器 17,270 点、石器等 20,625 点が出土していた。土器はⅡ群土器が 16,680 点出土し円筒土器下層 c・d 式が大半を占めていた。前回調査時の遺物分布では今回調査範囲付近からⅡ群 b 類土器の出土量が多くなっていたことから、遺物の出土傾向としても前回調査と同様の傾向である。前回調査では早期・後期・晩期の遺物も出土していたが、今回の調査では出土していない。石器は、スクレイパーと扁平打製石器が多く出土した。前回調査でも、すり石とスクレイパーが多く出土していた。すり石の中には扁平打製石器としたものが多く含まれているとみられる。同時期の遺構・遺物が多量に出土している木古内町大平遺跡では扁平打製石器が多数出土している。円筒上層 d₁ 式以前においては北海道式石冠がほとんど出土しない傾向がみられ、湯の里 2 遺跡においても同様の傾向をみることできる（北埋調報 328）。土製品は焼成粘土塊と擦切土器片が出土した。擦切土器片は 3 点出土し、Ⅱ群 b 類土器片を擦り切って短冊状に整形されている。前回調査では土製円盤が 1 点出土していたが擦切土器片は出土していなかった。

3 放射性炭素年代測定（表Ⅶ-2）

F-30・31 の年代を明らかにするため、フローテーションによって採取した炭化材を用いて加速器分析研究所に依頼して年代測定を行った。F-30 は石囲炉、F-31 は H-4 の覆土から掘り込んで作られた焼土で石囲炉であった可能性のあるものである。周辺からの出土遺物や昭和58年度調査で検出された石囲炉（S-1）などから縄文時代前期後半～中期前半を想定していた。

YS2-1 は F-30 から検出した炭化材で、 $2,800 \pm 30$ yrBP の測定結果を得た。測定結果からは晩期中葉という結果であった。今回の調査では出土しなかったが、昭和58年度の調査では晩期中葉～後葉の遺物が出土しており、この時期のものである可能性もある。しかし、YS2-2 の測定結果や F-30 周辺から晩期の遺物が出土していないことから、F-30 直上にあった木根等の影響により上層にあった晩期の炭化材が混入した可能性もあると考えられる。

YS2-2 は F-31 から検出した炭化材で、 $4,680 \pm 30$ yrBP の測定結果を得た。測定結果からは前期後半

の円筒土器下層d式頃という結果であった。遺構周辺から出土している遺物は前期後半の円筒土器下層c・d式のものが多く、測定結果と整合することから前期後半の遺構とみて良いと考えられる。

今回の調査結果と前回の昭和58年度調査結果を踏まえると、湯の里2遺跡では早期～晩期の遺物の出土がみられるが、縄文時代前期後半の円筒土器下層c・d式期に遺構・遺物が集中していることがわかった。このことから、湯の里2遺跡は縄文時代前期後半に最も利用され、以降中期～晩期にかけて細々と利用されている様子が窺われる。2回の調査が行われた範囲は舌状台地の先端部のごく一部であり、遺跡は舌状台地の南東側に広がっていることが想定されることから、遺跡全体の北西端を調査したに過ぎないと思われる。

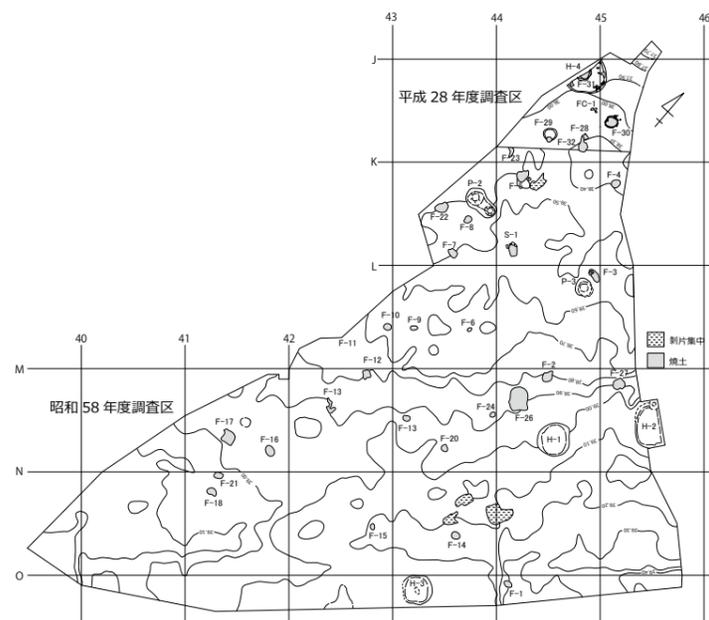
(酒井)

表Ⅶ-1 年度別遺構数・遺物点数一覧

年度	調査面積 (m ²)	遺構名					遺物分類			小計	合計		
		竪穴住居跡	土坑	石囲炉	焼土	剥片集中	土器	石器等					
昭和58年度	1,661	3	3	1	27	遺構	3,044	616	3,660	37,895			
						包含層	14,226	20,009	34,235				
						小計	17,270	20,625					
平成28年度	84	1		1	4	1	1	1	遺構	460	346	806	4,048
						包含層	2,265	977	3,242				
						小計	2,725	1,323					
合計	1,745	4	3	2	31	1	合計	19,995	21,948	41,943			

表Ⅶ-2 放射性炭素年代測定試料一覧

試料番号	遺構名	採取グリッド	層位	試料種類	重量 (乾: g)	採取日	測定法	想定年代	測定結果 (y r B P)	備考
YS2-1	F-30	J45b	焼土	炭化材	0.11	16.05.31	AMS	前期後半～ 晩期中葉 中期前半	(2,800±30)	石囲炉
YS2-2	F-31	J44d	焼土	炭化材	0.12	16.06.01	AMS	前期後半～ 中期前半	(4,680±30)	石囲炉?



図Ⅶ-1 昭和58年度・平成28年度調査遺構位置図

引用参考文献

論文・書籍等

- 小笠原雅行 2008 「円筒上層式土器」『総覧縄文土器』 『総覧縄文土器』刊行委員会
 可児通宏 2008 「縄文の施文原体と文様」『総覧縄文土器』 『総覧縄文土器』刊行委員会
 上條信彦 2014 「「扁平石器」の形態的分布から見た円筒土器文化圏の動態-半円状扁平打製石器、挟入扁平打製石器、挟入扁平磨製石器を中心に-」『青森県考古学 第22号』 青森県考古学会
 上條信彦 2015 『縄文時代における脱穀・粉碎技術の研究』 六一書房
 茅野嘉雄 2008 「円筒下層式土器」『総覧縄文土器』 『総覧縄文土器』刊行委員会
 小山正忠・竹原秀雄 2007 『新版標準土色帖29版』 日本色研事業株式会社
 高橋正勝 1994 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究4 (第2版)』 雄山閣
 戸苅賢二・土屋 篁 2000 『北海道の石』 北海道大学図書刊行会
 成田滋彦 2005 「円筒下層期覚書-土偶・土製品の基礎的資料-」『北奥の考古学』 葛西勲先生選暦記念論文集刊行会
 野村崇・仁礼秀道 1975 「北海道知内町サンナシ遺跡出土の縄文晩期遺物について」『古代文化』27-8 古代学協会
 野村 崇 1994 「北海道南部・中部の土器」『縄文文化の研究4 (第2版)』 雄山閣
 福田裕二 2005 「亀田半島における前期末葉～中期初頭の様相」『東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題-資料集-』 海峡土器編年研究会
 三宅徹也 1989 「円筒土器下層様式」『縄文土器大観2』 小学館
 三宅徹也 1994 「円筒土器」『縄文文化の研究3 (第2版)』 雄山閣
 村越 潔 1984 『増補 円筒土器文化』 雄山閣

団体・組織刊行物

- 知内町史編纂委員会 2015 『新知内町史』 知内町
 北海道火山灰命名委員会 1982 『北海道の火山灰』 北海道火山灰命名委員会
 角川日本地名大辞典編纂委員会 1987 『角川日本地名大辞典1 北海道 上巻』
 大川清・鈴木公雄・工藤普通編 1996 『日本土器事典』 雄山閣
 日本ペドロジー学会 1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』 博友社
 地学団体研究会道南班編 2002 『道南の自然を歩く』 北海道大学図書刊行会
 永井秀夫監修 2003 『北海道の地名』日本歴史地名大系第一巻 平凡社

ホームページ

- 知内町公式ホームページ
 北海道教育委員会ホームページ 「北の遺跡案内」

埋蔵文化財発掘調査報告書

木古内町教育委員会

- 1995 『釜谷5遺跡』 1998 『亀川3遺跡』 1999a 『釜谷遺跡』 1999b 『新道2遺跡』
 2003 『新道2遺跡II北地点』 2004 『蛇内遺跡』

知内町教育委員会

- 1972 『涌元遺跡』 1975 『森越遺跡』 1979 『湯の里1遺跡』

七飯町教育委員会

- 1979 『峠下聖山遺跡』

(財)北海道埋蔵文化財センター、(公財)北海道埋蔵文化財センター

- 1984 『知内町 湯の里遺跡群』 北埋調報18 1985 『知内町 湯の里3遺跡』 北埋調報32
 1986 『木古内町 建川1・新道4遺跡』 北埋調報33 1987 『木古内町 建川2・新道4遺跡』 北埋調報43
 1988 『木古内町 新道4遺跡』 北埋調報52 2011a 『木古内町 木古内2遺跡』 北埋調報278
 2011b 『木古内町 大平遺跡・大平4遺跡』 北埋調報280
 2012 『木古内町 木古内2遺跡(2)』 北埋調報293 2013 『木古内町 札苅5遺跡』 北埋調報294
 2014 『木古内町 木古内遺跡』 北埋調報304 2015a 『木古内町 新道4遺跡(4)』 北埋調報320
 2015b 『木古内町 大平遺跡(2)』 北埋調報321 2016 『木古内町 大平遺跡(3)』 北埋調報328

写真図版



航空写真



知内町遠景 NW → SE



遺跡近景 SW → NE



遺跡近景 N → S



調査前状況 N → S



調査終了状況 N → S



表土上面検出状況 E → W



調査風景 E → W



調査風景 N → S



列車通過待機状況 N → S



基本土層 (調査区南東部) E → W



基本土層 (45 ライン) S → N



遺物出土状況 (J44b) SE → NW



遺物出土状況 (J44b) SW → NE



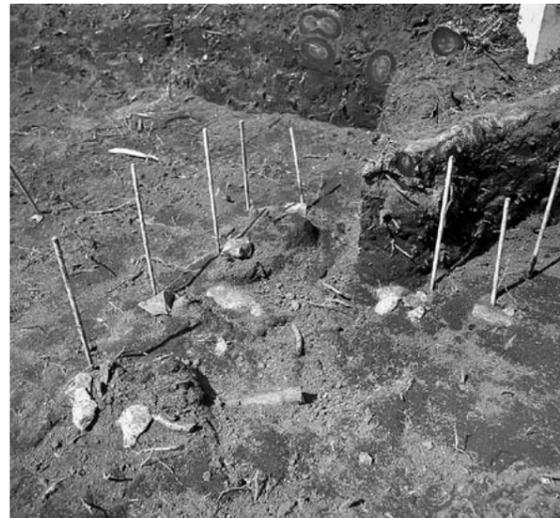
遺物出土状況 (J44d) E → W



遺物出土状況 (J44d) NE → SW



列車通過待機状況 N → S



FC-1 検出状況 S → N



H-4 調査風景 S → N



H-4 調査風景 S → N



H-4 土層断面 SW → NE



H-4 土層断面 SE → NW



H-4 完掘 S → N



F-30 調査風景 N → S



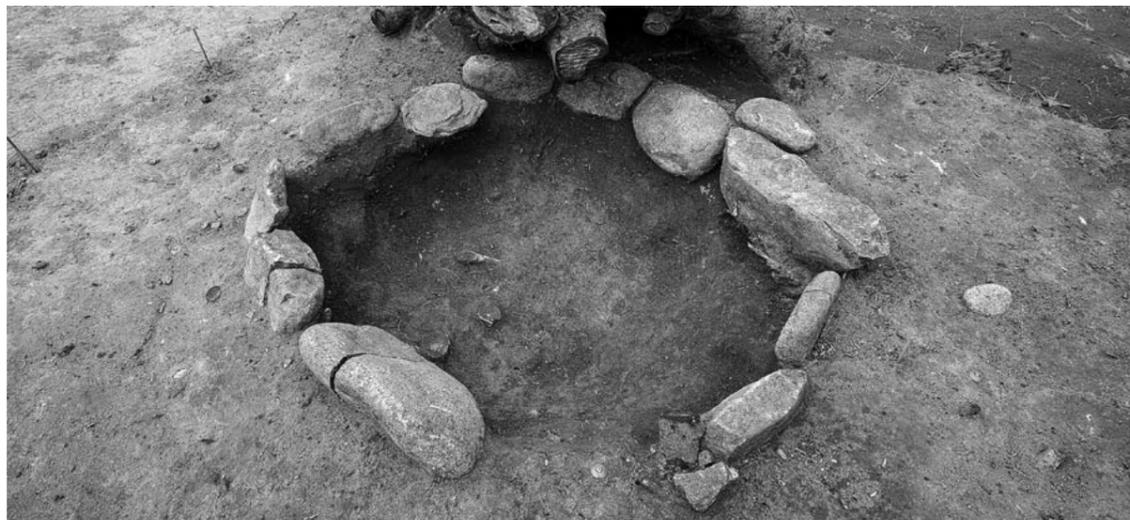
F-30 検出状況 SW → NE



F-30 土層断面 SE → NW



F-30 完掘 NE → SW



F-30 検出状況 SE → NW



F-28 検出状況 SE → NW



F-28 土層断面 S → N



F-29 検出状況 NW → SE



F-29 土層断面 S → N



F-31 検出状況 S → N



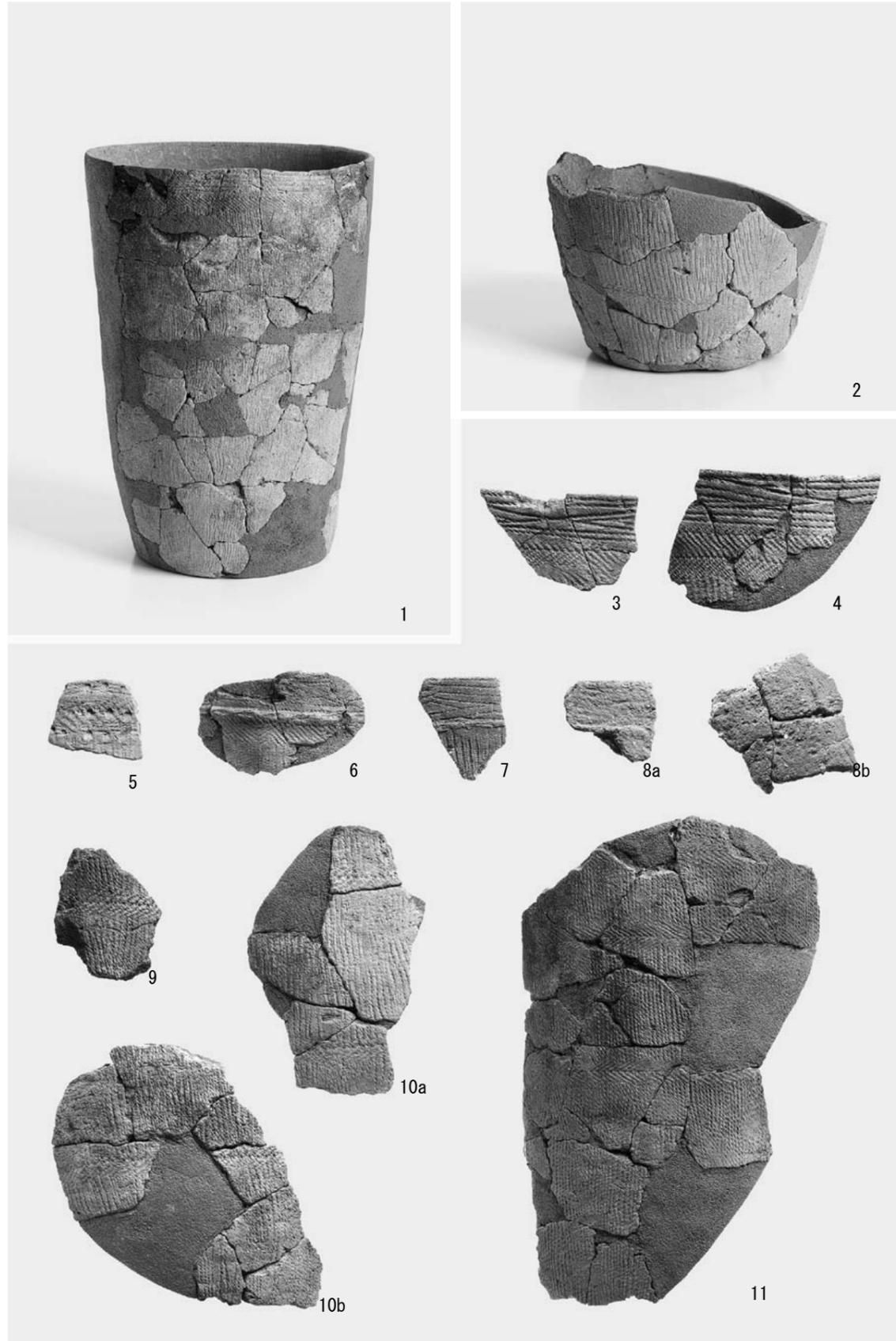
F-31 土層断面 E → W



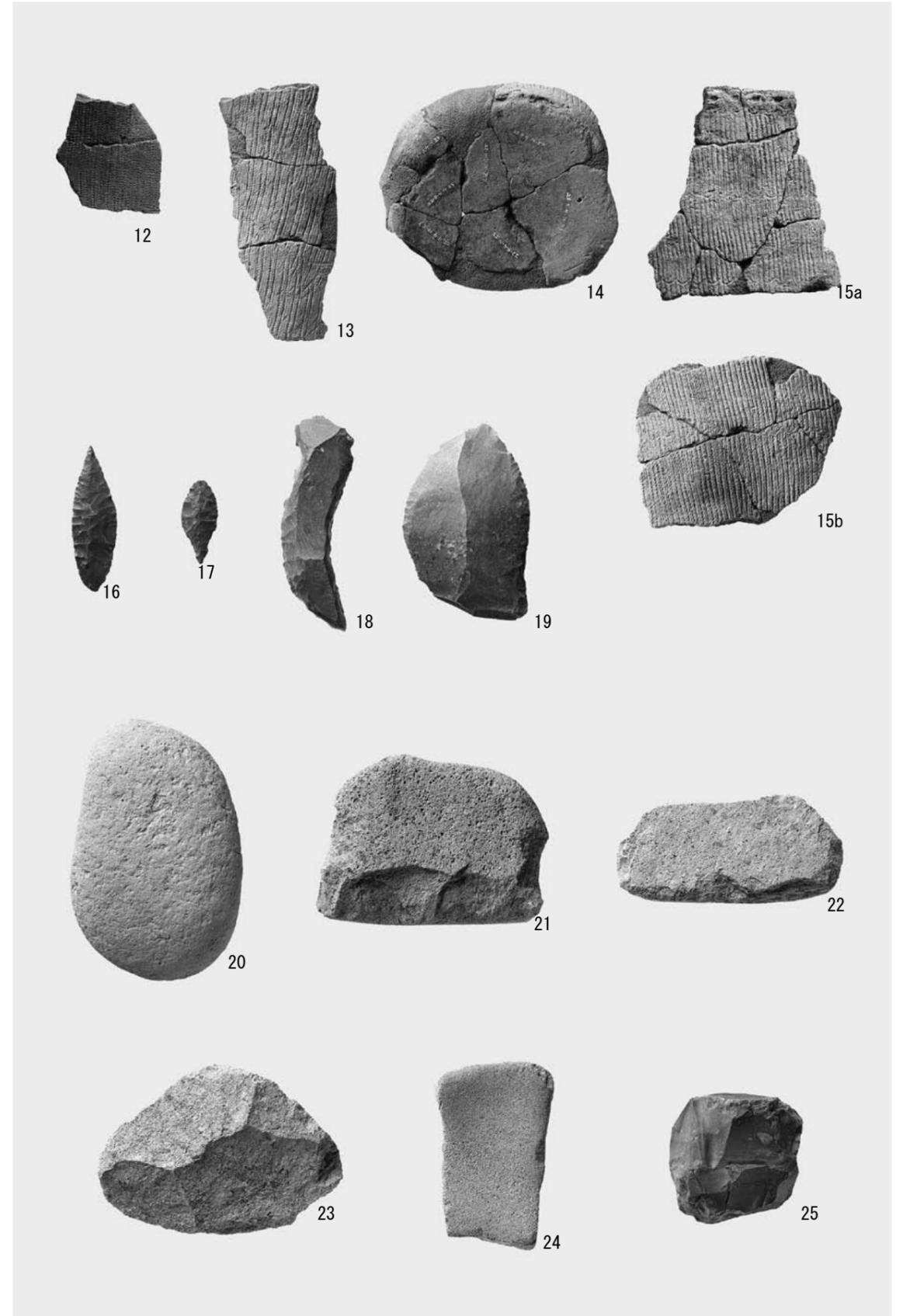
F-32 検出状況 N → S



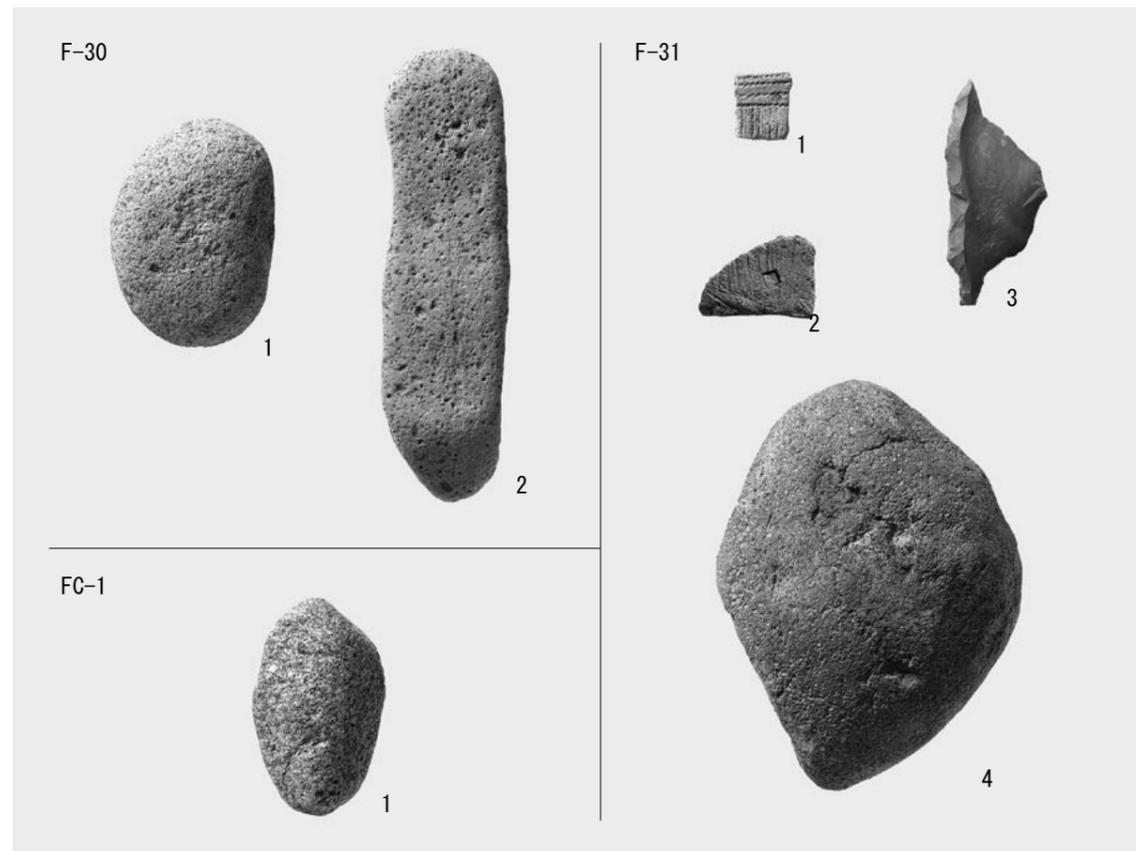
F-32 土層断面 W → E



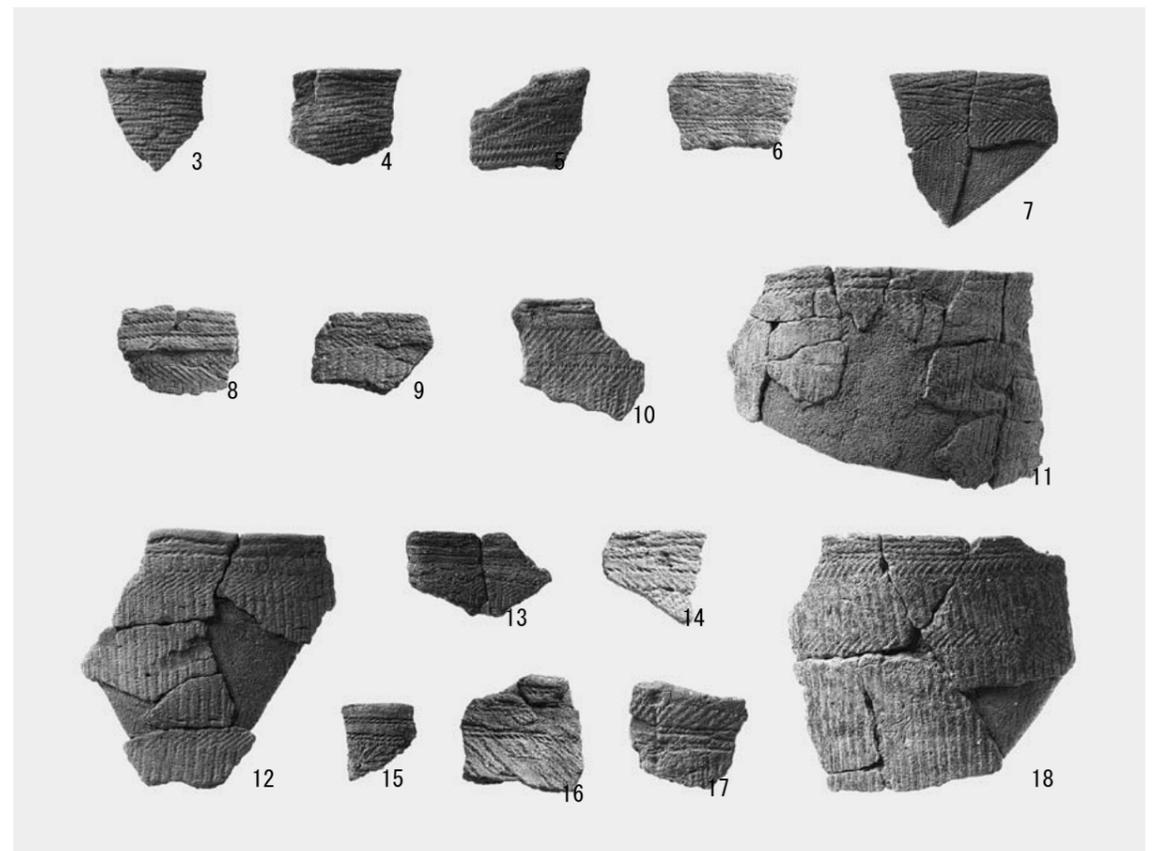
H-4 出土の遺物 (1)



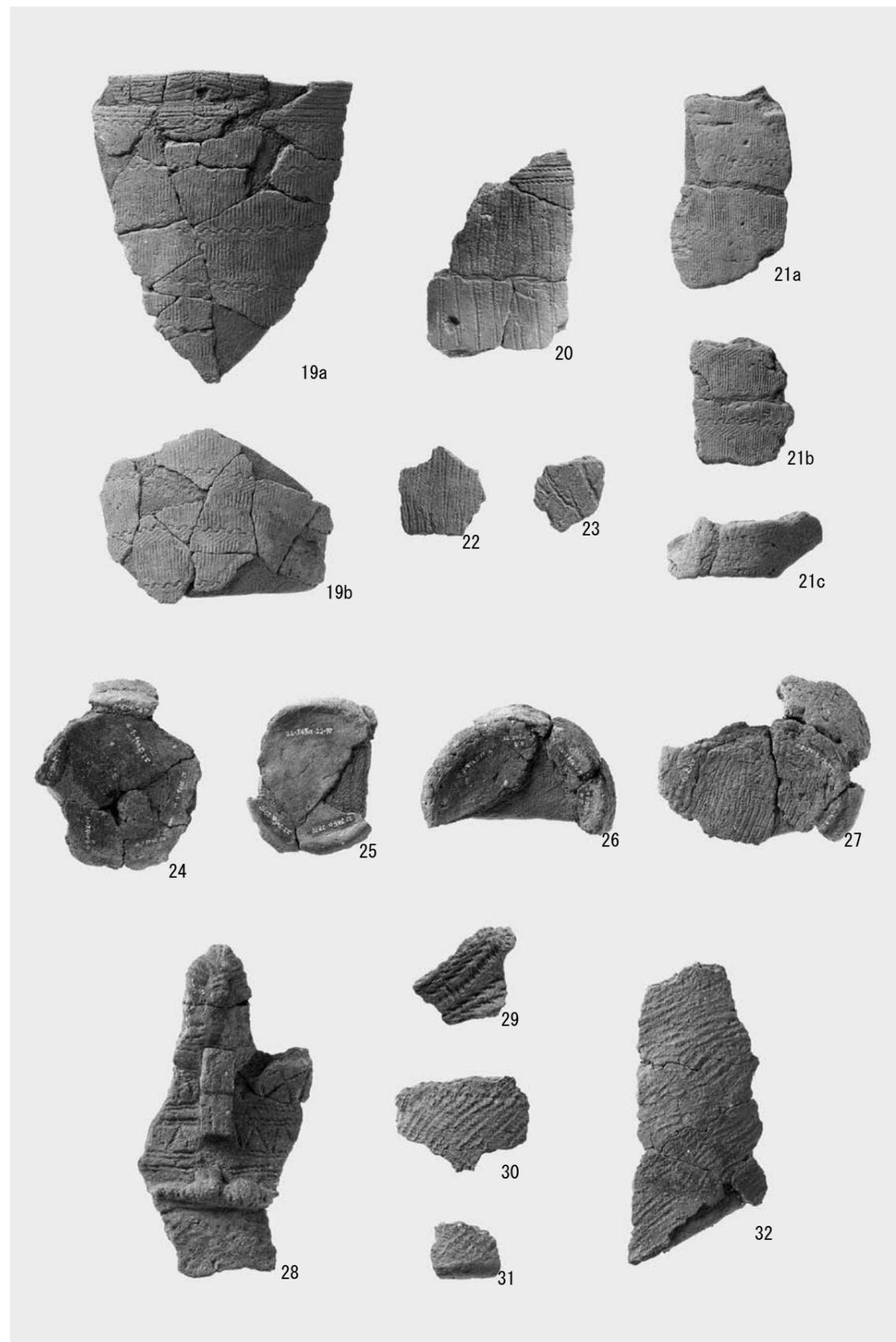
H-4 出土の遺物 (2)



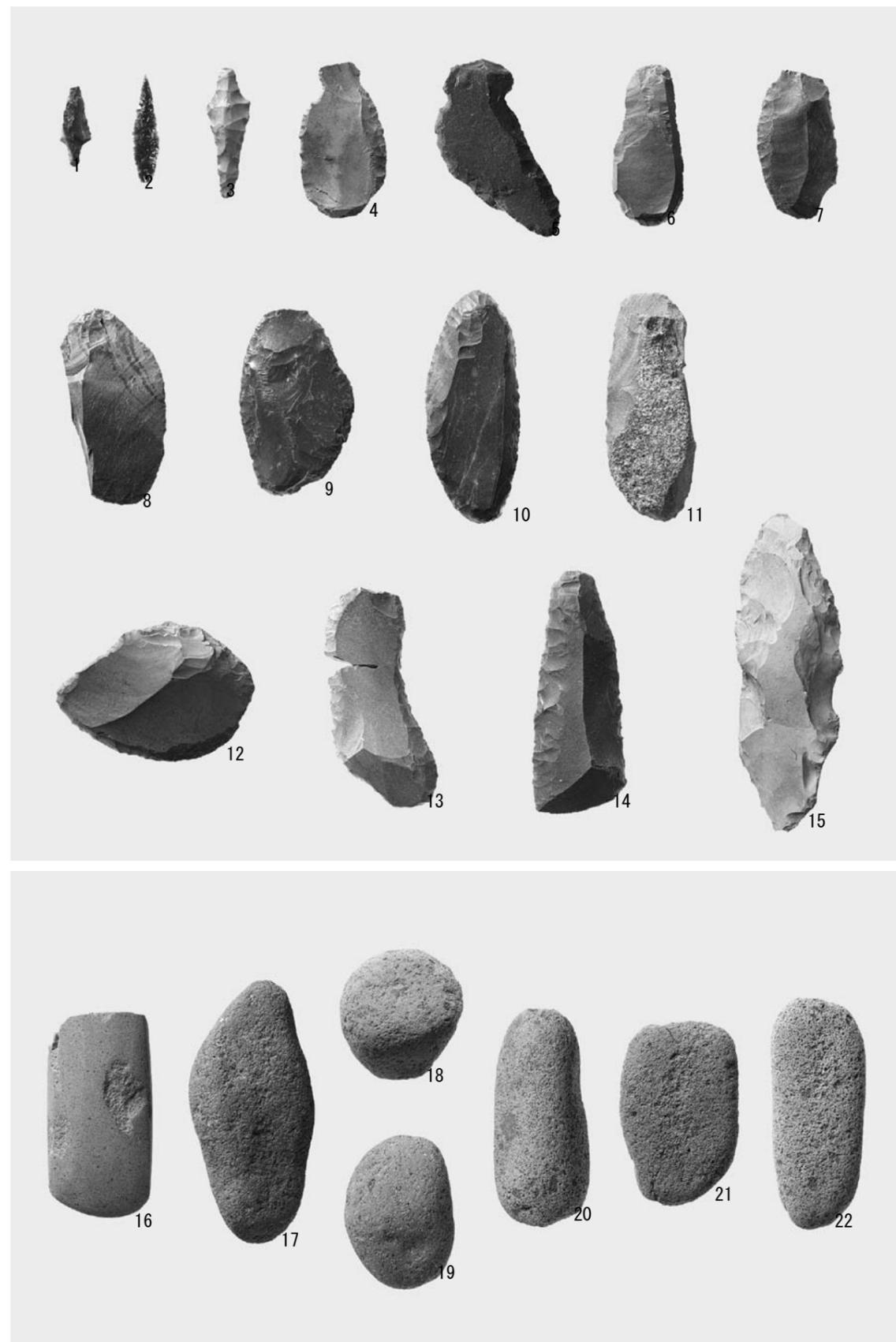
F-30・31・FC-1 出土の遺物



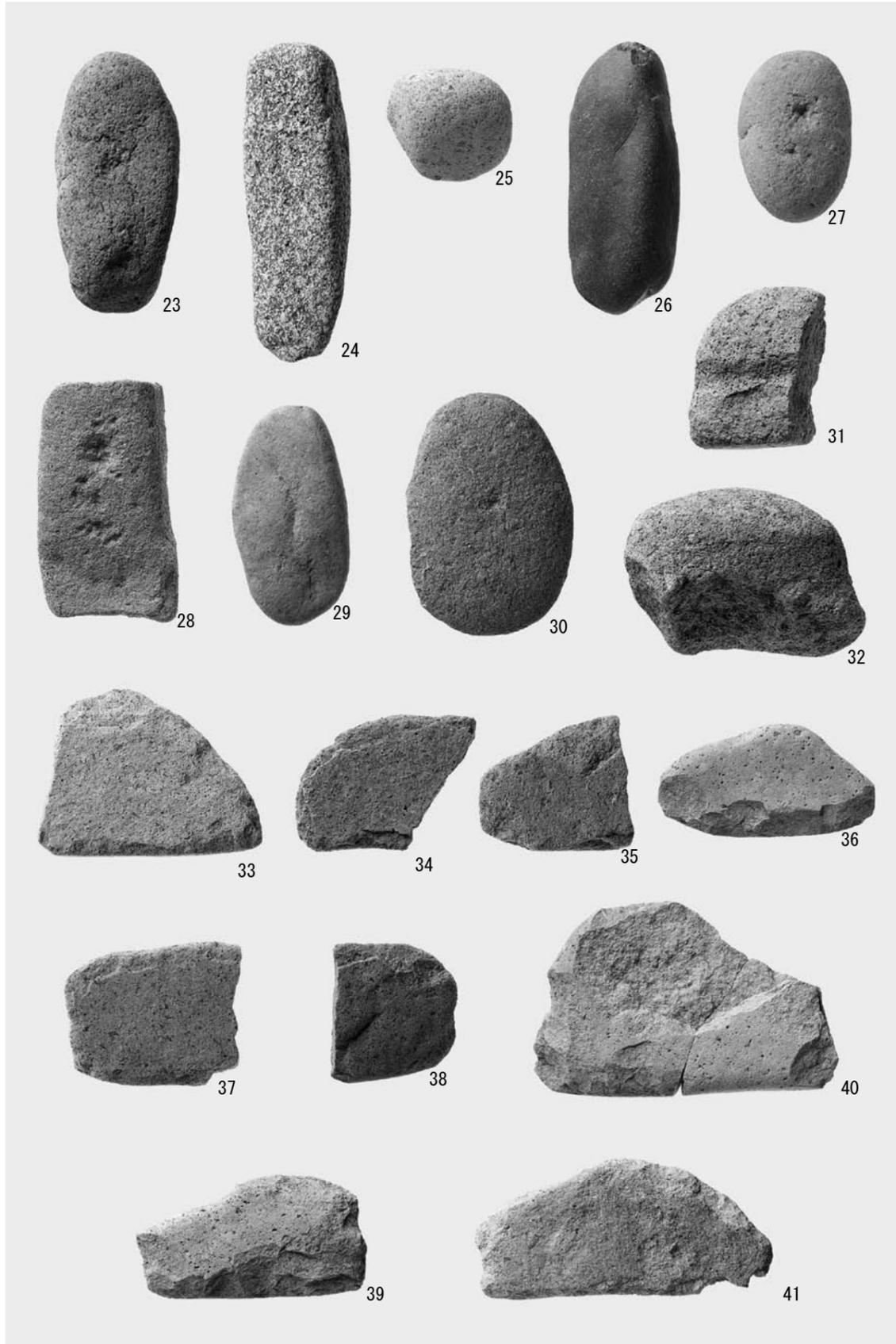
包含層出土土器 (1)



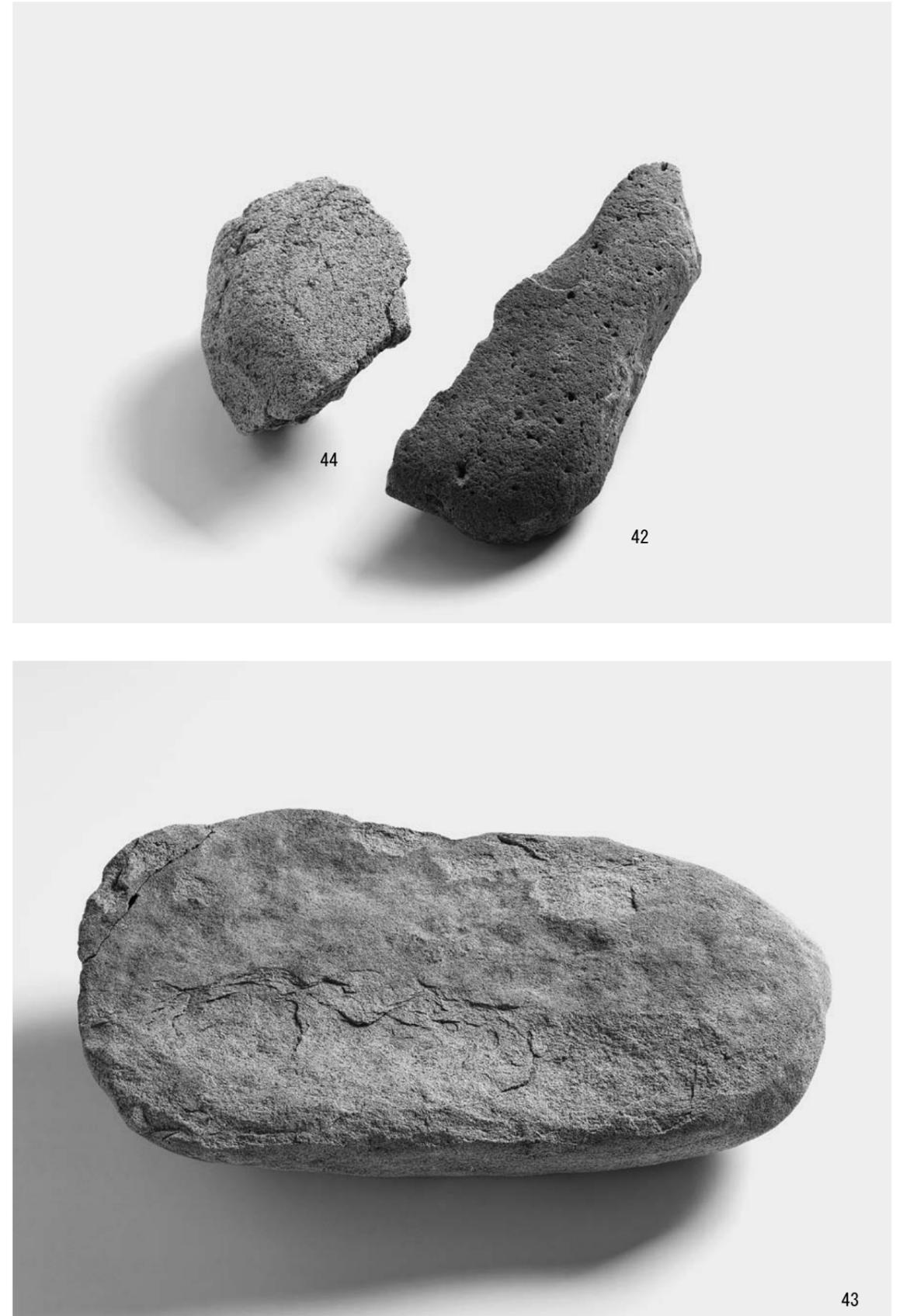
包含層出土土器 (2)



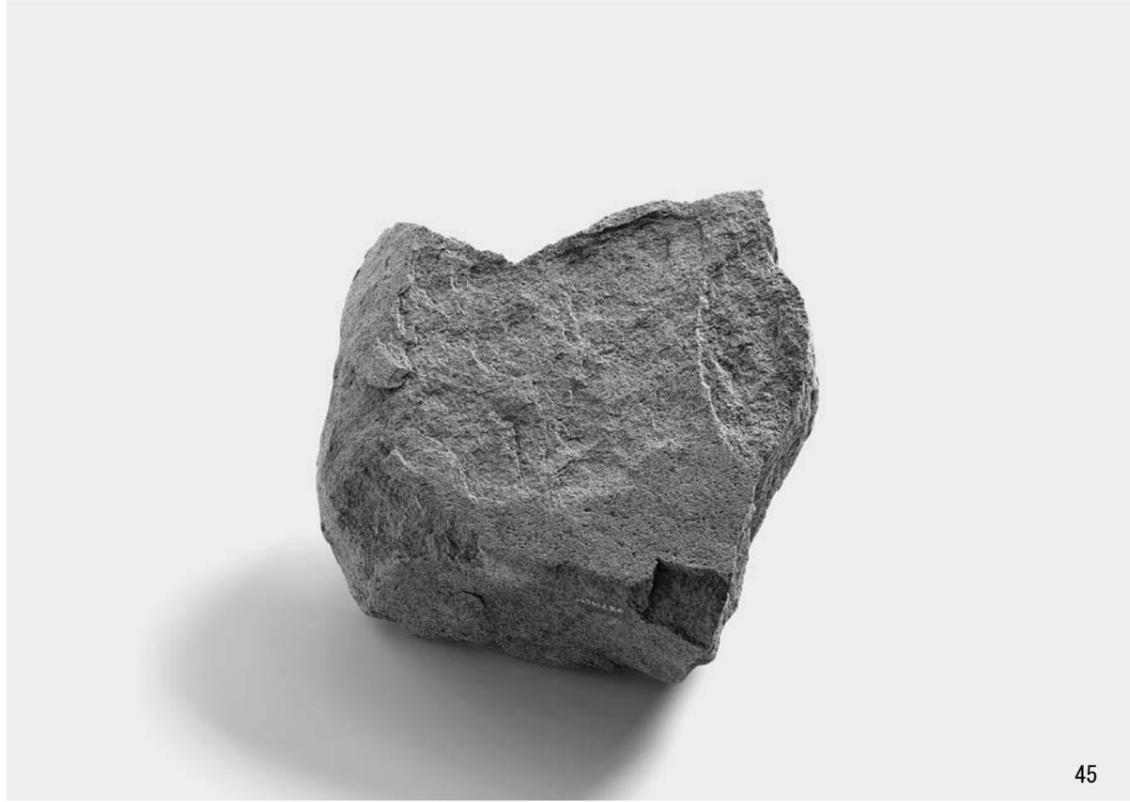
包含層出土石器 (1)



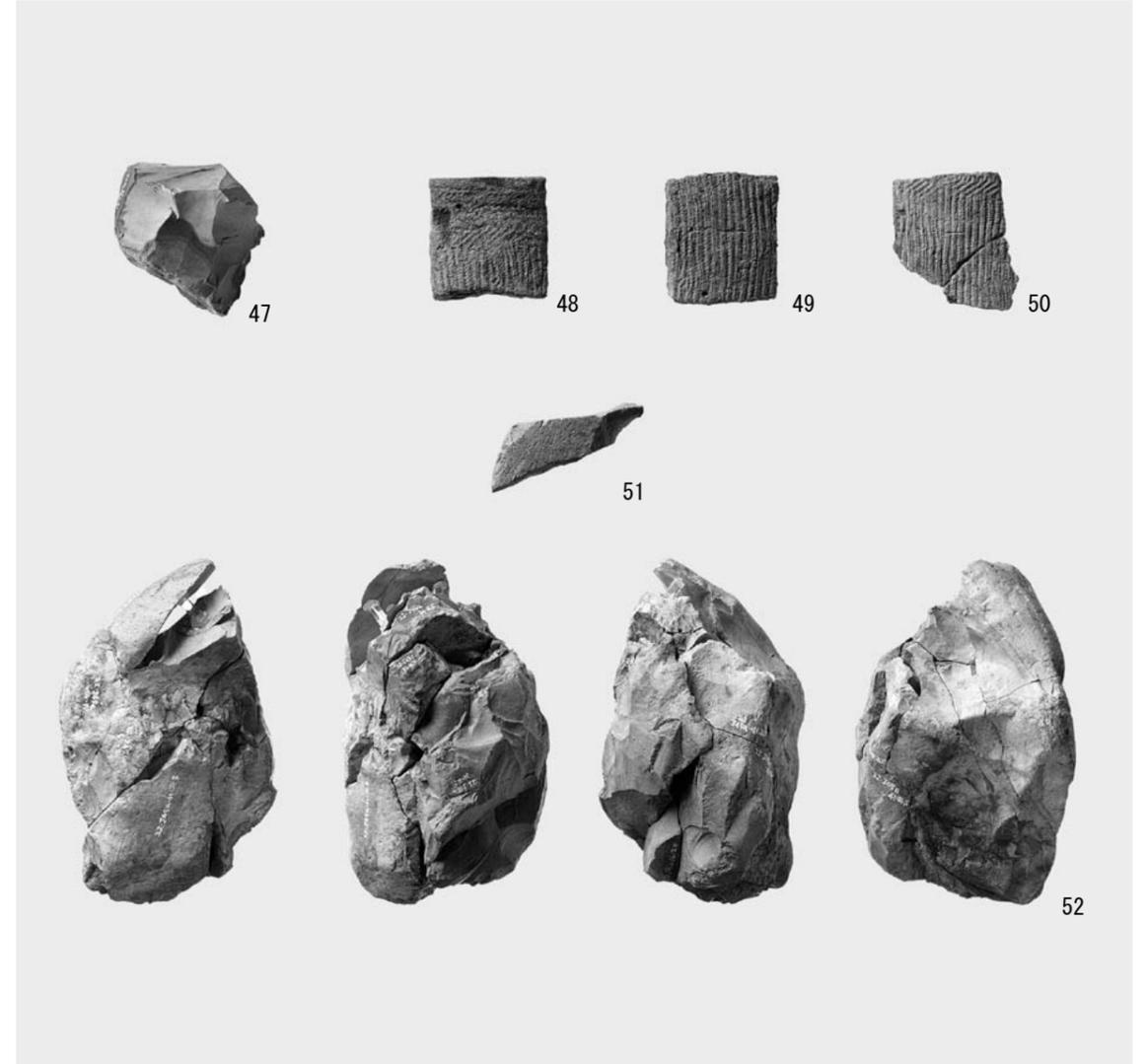
包含層出土石器 (2)



包含層出土石器 (3)



包含層出土石器 (4)



包含層出土石器 (5) · 土製品 · 石製品 · 接合資料

報告書抄録

ふりがな	しりうちちょう ゆのさと2いせき(2)							
書名	知内町 湯の里2遺跡(2)							
副書名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第334集							
編著者名	酒井秀治・吉田裕吏洋							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野幌685-1 TEL(011)386-3231 FAX(011)386-3238 E-mail mail@domaibun.or.jp ホームページ http://www.domaibun.or.jp							
発行機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成29(西暦2017)年3月24日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゆのさと 湯の里2遺跡	かひいそぐん 上磯郡 しりうちちょう 知内町 あだゆのさと 字 湯ノ里 ぼん 66番2	01333	B-04-18	J 44 c 杭 41度35分 57.41259秒	140度19分 54.00416秒	20160510 ~20160603	84㎡	北海道新幹線 建設に伴う 記録保存
				J 45 b 杭 41度35分 57.51741秒	140度19分 54.16887秒			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
湯の里2遺跡	集落跡	縄文時代 前期後半~中期前半		竪穴住居跡1軒、石囲炉・焼土5か所、 剥片集中1か所		土器 石器等		
要約	<p>遺跡はJR湯の里知内信号場・道の駅しりうちから南へ約500m、知内川の支流である出石川左岸の舌状台地上に立地する。</p> <p>湯の里2遺跡の2冊目の報告書となる。昭和58年度に津軽海峡線建設工事に伴い、(財)北海道埋蔵文化財センターによって1,661㎡の発掘調査が行われ、報告書(北埋調報18)が刊行されている。今回は北海道新幹線建設工事の防音壁工事に伴う発掘調査である。発掘調査範囲は舌状台地の先端部の84㎡である。</p> <p>遺構は、竪穴住居跡1軒、石囲炉・焼土5か所、剥片集中1か所を検出した。竪穴住居跡は縄文時代前期後半のものである。石囲炉・焼土は1か所が石囲炉、2か所が石囲炉の可能性のあるものである。石囲炉(F-30)は晩期中葉もしくは前期後半、その他は、前期後半のものと考えられる。</p> <p>遺物は、土器2,725点、石器等1,323点の合計4,048点が出土している。土器は、縄文時代前期後半がほとんどを占め、次いで中期前半のものが少量出土している。石器はスクレイパー・たたき石・扁平打製石器が多く出土している。土製品は擦切土器片・焼成粘土塊、石製品は線刻礫が出土している。</p>							

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登載番号、経緯度は世界測地系による。

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第334集

知内町 湯の里2遺跡(2)

- 北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成29(西暦2017)年3月24日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp>
E-mail mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社 キサツアルファ
〒062-0933 札幌市豊平区平岸3条16丁目1-45
TEL (011)850-9577 FAX (011)850-9579

